

---

# Muv-luvに来た転生者（笑）

ザヴァーン軍曹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Muv-Muvに来た転生者（笑）

### 【ZPDF】

Z2219M

### 【作者名】

ザヴァーン軍曹

### 【あらすじ】

みんな～ひろみちお兄さんだよ～。サー、嘘です。こんな性格の男がマブラヴの世界に光をともす！？頑張れ俺、負けるな俺！みたいな乗りです。

## 第1話 俺、死亡…って、え…？（前書き）

ども！ザヴァーン軍曹つす！

これはいわゆる処女作つす！

駄文ですけど堪忍してください！

マブラヴォルタのゲームは一回やつて友達に貸したら壊されたんで

知識は曖昧つす！

それでもいい人だけどうぞ！

最後に、ゆとり？なにそれおいしいの？

## 第1話 俺、死亡…って、え!?

「フツ…やつちまつたぜ」

空中に浮かびながら遙か下のグチャグチャになつた死体を見つめながら呟く。

は～いみんな元気かな～？ 桜井 連で～す  
… サーセン、ちょっとテンパつてるもんで。

だつて俺、死んだんだよ！？ あのグチャグチャな死体、俺なんだ

つて！－！

「シャレにならなきゃ」わ……」

俺が絶望の声を上げた瞬間

「はい、今まで人生お疲れさん。そしておめでとう。君は選ばれた

「え？」

杖持つてロープ来てて白髪こしらひげをかなり伸ばしてい、爺さんが声を掛けて来た。

驚きのあまり、気の抜けた声で返事をしつけたナビ……。

「え、選ばれたって？ それにあなたは誰ですか？」

ちやんといの爺さんの言葉は聞いていた。

爺さんは俺の声を聞くとその長い白い鬚を触りながら声を上げた。

「ワシか？ ワシはこの辺の世界担当の神じや

「か、神！？」

そんなん信じられるかい！と思つたが、こんな状況（下で俺死んでる。+空中に浮いてる+爺さんも浮いてる）では信じるしかないな。

「つむ、実はの……死んだばかりで悪いんじやが、君には行ってもらいたい世界があるんじや」

「行つてもりたい世界？ 日本語でおく」

「いやの？ つこせつき思つたんじやよ。決まつたレールが敷かれとおる世界に小石をポンッと投げ入れたらどうなるのかの？ と」

石を投げ入れるたゞりをしながら爺さんは続ける。

「だから偶々その瞬間に死んだ君にその小石役をやつてもうおつと思つての」

「つまつ……やつこつだつてばよ~」

「つ~む……君の解る言葉で言つなり……転生？」

「へ、転生となー!?」

聞き慣れ過ぎたその言葉に必要以上に反応してしまつ。

どつかの誰かなら『仕方ないね』と空耳を聞かせてくれるだひつ。

「おお、結構乗り気じゃないかー、いいぞいいぞ、その意氣だー！」

「ち、ちなみに行かせてもいいのとしたらひつこい所に……？」

俺がちょっと期待を含んだ声を上げると、爺さんは口をおかしそうに歪めて言つた。

「マーブラヴォルタネイティブ……じゃよ」

「は……？」

時間が止まつたかのよひに思えた。

マーブラヴのオルタ。

聞いたことはある。超凶悪な地球外生命体により人類が絶滅一歩手前まで追いやられる話。

ロボットに乗り、勇敢に戦うが結局ほとんど死んでしまった作品。やつた人が皆口をそろえて言つ事は、『神』。そんな事はどうでも良い。

つまり俺が何を言いたいかと言つと……

……えええええ！ ちょ～えええええ！  
ちょつと待つてよー そんなの怖すぎだろー！  
むしろもう一回この世とおさらばするわーー！  
やめてー俺のライフはもうつよー。

そんな俺の気持ちを悟ったのか、爺さんはまた口を歪ませて言つた。

「残念ながら君に拒否権は無いぞ？」

「えー？」

「君にはワシの暇つぶしに付き合つてもひどいじゃからな

「暇つぶし……？」

「やつ、暇つぶしじゃよ。神様は退屈なんじや

なんだこのクソジジイ。

自分勝手すぎだろ。神様信じてる全世界の人に謝れや。

「……一つ聞いても良いですか？」

「ん？ なんじゃ？」

少しの怒りを含めた俺の言葉に何食わぬ顔で聞き返す神。今俺の顔は怒りに歪んでんじゃないだろ？

「なんで俺なんですか？」

「特に意味は無いだろ？」

「は？」

「お主は一々何かのドラマや映画に『なぜこいつが主人公なんだろ？』なんて考えるのか？ 違つじゃろ？ お主は勘違いをしておる。お主だから選ばれたのではなく、選ばれたのがお主なんじゃ」

ドヤ顔で言つ神（笑）。

よく分からぬが、俺はもう逃げられないらしい。

「ハア……もうここです。行きますよ」

「まあまあ。心配なのは分かる。じゃからおぬしへビーチサップラ  
イズじやー。」

諦めの声を上げると神（笑）は俺の心を察したのかそつそつと手に  
持っている杖を俺に振りかざした。

すると杖の先端から光の粒子が出始め俺を覆いつぶす。

「な……ー。」「、」  
「な……ー。」「、」

光が晴れると俺の姿は

「アスラン・ザラになっちゃるーー？」

そう、ガンダムSEED DESTINYの影の主人公のアスラン・  
ザラになっていた。（大人っぽい18歳モード）

「どうじやー見た目だけじゃなく、声、身長、そして能力まで丸々  
『ペーしたんじやぞ？』

「の、能力までーー？」

またもやドヤ顔で言つ神（笑）の言葉に思わず声を荒げる。  
つまり……「一ティネーター？ S E E D ? 天才的な操縦技術？  
やだこれお得。

「あ、ありがとうございます～！」

絶望の中にも一筋の希望の光が見えて来た！  
もう死ぬなんて真つ平御免なんだ！

「これが神クオリティさー サクニ！ インフィニットジャステイ  
ス～」

ドラえもん口調で言つと、またも光が集まり、晴れると俺の大好きなMSインフィニットジャステイスが目の前に出現した。

「すげえ……！」

その光景に思わず言葉を漏らす。  
ムカつく奴だと思っていたけど、こんな事が出来るのは本当に凄い  
と思う。

「…あ、でも予備やらなんやらほりつたこびつすれば…？」

「んーパワーは核機動じやから無限だし、ビーム兵器はそのパワーからエネルギーをもらつておるのだし、そつじやの一消耗品はおぬしが目が覚めた時、コンテナを近くに置いておくんでその中のを使え」

「俺の言葉に、髭を弄りながら答える神。  
少しカツコいいと思ったのは秘密だ。」

「よ、良くわかんないけど一応了解です！」

「まあいいわい。そろそろ出発じや、準備はいいかの？」

「はいー。」

「目が覚めたらジャスティスにのつてると想つから。それと何かあつたらわしの事を呼べ。ワシらの撃に引っかからない程度に手助けしてやるわい。それじゃ、いつてこいー。」

途端に俺の体を浮遊感が襲う。

慌ててしたを見ると、大きな穴があいてました

「つて、アツー！」

こうして俺の新たな人生が始まった。

## 第1話 俺、死亡…って、え!?(後書き)

どもっす

いかがでしたでしょうか?

前書きに書いた通り曖昧なんいろいろ教えてくれると嬉しいです

^ ^

では!

## キャラ設定（前書き）

タイトルがつきます

## キャラ設定

名前 桜井 連 アスラン・ザラ

年齢 18

容姿 アスランと一緒にイケメンさん。

性格 軽い、お気楽、あほの三拍子。だけど一応ハッピーハンドを用意する。

死んだあとに何故か神に選ばれ、世界を救うことになった男。

死んだときにアスラン・ザラの力とMSインフィニットジャスティスをもらつた。

MS運転技術は白銀をも凌駕する。さらにSEEED因子を持ち、秘めたる力を持つている。

また機械関係はお手の物で、整備ならそこらぐんの整備士に負けない。（ハロも作れることからかなりの腕前だと言える。）

## ZGMF-X19Aインフィニットジャスティスガンダム

ギルバート・デュランダルに異を唱えるラクス・クラインを旗頭とする旧クライン派の手により、ZGMF-X20A「ストライクフリーダム」と同時期に開発された機体で、セカンドステージシリーズMSのデータとZGMF-X09A「ジャステイス」のデータを掛け合わせ、宇宙に隠されたファクトリーにおいて完成させたものである。

「ストライクフリーダム」同様に新型核エンジンの搭載と白銀の新式フレームの採用により、「ジャステイス」の数倍の戦闘力を獲得している。

全高：18.9m

重量：79.67t

パイロット：アスラン・ザラ

### 【武装】

頭部機関砲 × 2 : MMI-M19L 14mm2連装近接防御機関砲

胸部機関砲 × 2 : MMI-GAU26 17.5mmCIWS

脚・脛部ビームカッター × 2 : MR-Q15A グリフロンビームブレイド

腰部ビームサーベル × 2 : MA-M02G シュペールラケルタ

リフター部ビーム砲 : MA-6J ハイパーフォルティスビーム砲

リフター部ビーム砲収納時の短ビームサーベル × 2 : MA-M0

2S ブレフィスラケルタ  
リフター 主翼ビームカッター × 2 : MR - Q17X グリフォン  
2 ビームブレイド  
リフター 先端ビームサーべル × 2 : MA - M02G シュペール  
ラケルタ  
ビームライフル : MA - M1911 高エネルギービームライフル  
ビームブームラン × 2 : RQM55 シャイニングエッジ ビームブームラン  
ビームシールド : MX2002 ビームキャリー シールド  
シールド内アンカー : EEQ8 グラッブルスティング

## キャラ設定（後書き）

こんな感じですへへ  
ではこれからもよろしくお願いしますー。

## 第2話 アスランハイヤーこまへす！（前書き）

タイトルに意味はありません！

## 第2話 アスランハイヤーこまへす！

「知らない」コックピットだ……

はこモード。当たり前だと言わない！

なんか言いたくなる気持ちわかるでしょ？

わかんない？

そ。

「とこうか本当に来たんだな……」

マジックの世界。

BETAと戦う死の世界。

……やべっちょつとおびつた。

「ナウこせー」だ？

まあ原作知らないからどうもくそもないんだけどな

「うーん、と?」このボタンで起動して…お!起動したした

俺がボタンを押すとウイーンなんて音を出してジャステイスが起動した。

…こいつ、動くぞ! 某初代ニユータイプ

「で、このレバーが操縦桿で…おお! 分かる、分かるぞ!」

どうやらアスランの記憶が俺の中にあるようで、動かし方が簡単に分かった。

「いけるぞ! ん? レーダーに反応? 人、だな

コックピット内のカメラで下を見ると一人の男が立っていた。

俺はスピーカーを使って男に話しかけた。

「…アスラン・ザラだ。貴官は何者だ」 かつこうつけ

すると男は驚いたように口を開けた。

「「つま…え、衛士が乗ってんのか…?」

「名乗れ、貴官は何者だ」

「え、あ、お、俺は白銀 武です!」

え?白銀、武?

主人公キター!

まさかのHンカウント!?

ド クエの勇者様も真っ青だよ!

「あ、あのー? (やつぱり俺の『あの』世界と違うーあの時あったのは戦術機が一機、それも壊れた奴だったはずだ!)」

「あ、ああ。すまない」

「アスランせんぱぢうじこんなとこ?」

んーホントの事いおつかな～？

「どうせばれるんだしねー。

でも死んだってのはちよつとやだから俺も飛ばされたつていつた方がいいな。

「少し待ってくれ。今降りる」

コックピットから降りて俺は白銀武と向かい合つた。

ウホッ！いい男！

… サーセン、自重します。

「あ、あのそれで…（すげえ。モデルみたいな人だ）」

「あー肩つ苦しいからため口でいいよ。同じ年だし。やつるのはちよつと見栄張つて言つただけだから」

「あ、ああ」

「それで俺の事なんだけど…驚くなよ？」

～説明中～

「えええええええー？」アスラランもいつの世界に飛ばされたー？

「あ～だからひむとこつて」

俺が違う世界から来たと聞いて武は驚く。

まあ普通の反応だよね。

「じゃ、じゃあ！」の戦術機は…？」

「戦術機じゃなって、MS。俺の世界の兵器だ」

俺の世界じゃないけどこよね。

似たようなもんだし。

「MS？兵器？」

「ああ。俺の世界じゃこれに乗つて戦争をしてたんだ。人同士で」

「人同士で……」

「やつぱり」「んな世界を経験しちやつと人同士で争そうなんて馬鹿  
らしこよな?」

「やつだな……」

見るからに落ち込む武。

うん、いい子や。

戦争してる奴らに見習わせたい。

「で? これからどうすんだ?」

流石に進まないのでもうかるか聞くことにした。

「やつだつた! 基地に行かなきやー!」

「基地?」

「ああ。横浜基地だ」

「ふうん。俺も行つていいのか?」

「ああ!あたりまえだ!」

「うし、じゃあジャステイスに乗つてくれ

「ジャステイス?」

「この辺の名前だ。インフィニットジャステイス、果てない正義  
つてね

「いい名前だな……」

「せざれ。とつあえず行け!」

俺と武はジャステイスに乗りこんだ。

ジャステイスの「ツクピット」は広く、三人は入れる。

一人乗つたぐらごじゃざつないことないぜー！

……あつそついやなんかコンテナがあるつていってたな。  
んー、おーあつたあつた。武の家のすぐ隣に巨大なコンテナがある  
じやん。

俺はそれを持ちあげる。

よし、これで行けるな。

「武へ、横浜基地の場所わかんだら？」

「ん？ ああわかる」

「んじや案内よろー」

「めっちゃ近かったな

近くにジャステイスを止めて、途中から歩いた。

とこりか最初から乗るひつよりなかつたっぽい。

「なあ武」

「なんだ？」

「なんか門番つまひのがいるだ？」

「こりな

「ううあわぬ。」

「とつあえずこくへ

わ～短絡的～。

だけどせこに痺れる憧れるううう！

「おい、 じぶん所で何をしてるんだ？」

「外出してたのか？」

武と話しながら歩いてたからか気がつくともう田の前に一人の衛士だっけ？が立っていた。

てか銃持つてんだけビ…。

こわー

「あ、 ああ」

「「」つや また物好きが居たもんだ。」

いやいやいや！物好きでかたづけられる問題なの？

なんの装備も無しに外出歩いてんだけぞ？

馬鹿なの？死ぬの？

「通るんだつたら許可証と認識票を掲示してくれ。」

そんなのないよ！俺オワタ。

「頼むー！呼せんせ…じゃなくて副司令に会わせてくれー！」

俺がー（^○^）ーしてると武が声を荒げた。

「副司令に？」

「少し待て。今聞いてみる」

聞いてくれんのー？どんだけサービス精神旺盛だよー。

普通に考えてそれはいけない行動でしょー！？

不審者だよー？許可証も認識票も持つてないのに？

「~~~~~」

そんなこと考へてる間に一人の男は電話で聞いているようだ。

「なんかだめっぽい。

電話終わった人なんか顔が怖いもん。

ガツ！

「…！？」きなりなにすんだ！？」

案の定かよ！てか銃でいきなり殴るつてひどくね？

どんだけ血氣盛んだよ！小学生でもつかはしましだぞ！

「香月副司令は貴様たちなど知らんそつだ！」

「立て！貴様たちを拘束する」

なんか腹立つな。

「いらっしゃりでいらっしゃアスランパワー見てやつか！」

「わあおとなしく来るんだ」

肩を掴まれた俺は、

「だが断る」

その手を掴み、足払い。

「は？」

そのまま馬乗りになり関節を決める。

「い、いででででで！」

「き、貴様！」

もう一人が銃を突き付けようとした瞬間、

バーン！

俺が馬乗りになつてゐる方の男の銃でもう一人の銃を撃ち落とす。

「うあー!?

そのまま銃を突き付ける。

「チエックメイト、だな(決ました)」 かっこつけ

「ア、アスラン…お前強いな」

「だろ?」

パチパチパチッ

「「ー?」

俺が武に褒められて浮かれていると突然拍手が聞こえた。

「あんた、やるじゃない。見事だったわ」

拍手をしていたのは……わお!超グラマーな美人!

「 ゆ、 夕呼先生！」

突然武が叫んだ。

夕呼先生？この人が副司令？

「 …？… あたし教え子を持つた覚えはないわよ？」

そらそーだ w w。

てか夕呼さん！俺だーー結婚してくれーー！

## 第2話 アスランでいざります！（後書き）

どうでしたでしょうか？

最初に言つた通り曖昧なんでアドバイスや感想をくれるといつれしい  
ですへへ

♪感謝コーナー♪

焼肉定食様、マサト様

感想＆メッセージありがとうございました！

これからもよろしくお願いします！

では！ノシ

### 第3話 漫画版のタロウさんの胸のでかわせ異常（前編）

お久しぶりです！ザヴァーン軍曹です！

久しぶりに執筆したから勘がなくなつていやがるぜ……。

どうか見捨てないで！

### 第3話 漫画版の夕呼さんの胸のでかわせ異常

「なるほどね……」

俺たちは今、執務室にいる。

あのとき、夕呼さんがなんとか場を収めてくれたからね。

まあ俺が謝りまくっただけなんだけ

とこもかくにも武の説明によりなんとか理解してもらえたようだ。

因果律量子論？そんな感じだっけ？

なんか聞いた話でここの人は人の心を見れるみたいな女の子がこりつて聞いてたからアスランの戦いの記憶でも見てかつこいいとこ見せようとしたら、仲間が死ぬとこばっかで鬱になつて話聞いてなかつたんだよね。

自重自重。

みんなの分まで戦つぞーーーつて念じとー。

「信じてもういたんでしょうが……？」

「やうね。少なくとも信じて居る理由はあるわ。あたしにしか分

からない理由だけビ

「？」

「いや、なんでもないわ。… で？ あなたは？」

「え、あ、はい。アスラン・ザラです」

「お詫びじゃないわよ…。あなたはなんなの？」

なんなの？

ビビッショ… なんて言やいいんだ？

素直に死んでもおかしくないか？ いやこやかんな」としたり……

~~~~~

「死んでもました！」

「なじゅー！ 回死ね」

バーン！

なんてことにもなりかねん！

いや、大丈夫さ！夕呼さんがそんな短絡的なわけがない！

あ、でももし仕事のストレスでイライラしてたり。

くそ！こうなつたらアスランの、ガンダムSEEDの世界の事を話す！ジャスティスのこともあるし！

でもウソつてばれたら最悪殺されるよな…。

ええい！逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！ 某  
新世紀の初号機パイロット

桜井 連、逝きます！（誤字にあらず）

「俺は武とも違う世界から来たんです」

「？」

「俺の世界は戦術機のような機体…まあモビルスーツMSって言いつんですけど、それで人同士で戦争してたんです」

「人同士で、ね」

「はい。まあ『純粹な』人同士ではありますんが」

「？」

「実は…」

（説明中）

「…つまり、あんたはコーディネイター、遺伝子をいじって生まれたヒトなのね」

「はい」

俺はあらかた説明した。

ナチュラルやコーディネイターのこと。

それが発端になつた一度の戦争の事。

てか、アスランの感情も少なからず俺の中にこもからこひこひ泣きそうになる。

「アスラン……お前……」

「ふ……でも証拠がなきやね~」

でも、武つてキラ・ヤマセ…ゲフンゲフン!

「ありますよ。必要なうすぐこでも見せましょ~」

「あらかじめ食いついてきたか……。」

これでジャステイスを見せれば万事OK!

「…あるの?」

「INの基地から少し離れたところに俺のマジを待機させています。それを持つてきたいんですけど……」

「アハ、アハ、アハ」となり……少し待つてなさい」

そういうことと夕呼さんはどこに連絡を取り始めた。

アハ、こや戦術機ついでに、のべりーのスペックなのかなー？

ザクやジン……じゅあ流石に弱すぞか？シグーべりーか？

ゲルググやゲイツだと強すぎるしなー。

「白銀、あなたには前の世界と同じく207衛士訓練小隊へ編入してもいいわ

「あっがとうござまわー」

いつのまにか連絡し終えた夕呼さんが武にそう告げた。

「あとはどうすればいいかは、あなたしだいよ」

「はいー。」

「武、がんばれよ」

「ああ、アスランもー！」

そう言つて武は出て行つた。

「あの、それで俺は？」

「少し待つてなさいって。いくらなんでもあんた1人で取りに行かせるわけにはいかないでしょ？それにあんたの言つたことが本当ならそのMSはこっちじゃオーバーテクノロジー、機密にしないとなんだからあたしが一番信用できる人を呼んでるのよ」

「なるへそ」

「へそ？」

確かに。

そりゃそうだ。

夕呼さんは頭の上にマークを出していたが、言いたいことを言つて終えたからかソファーに座つた。

……シーン。

く、眩気が重い……。

「あの、夕呼さん

「なに?」

「結婚してくださー」

「ブーー」 ハーネーを吐き出した音

だから和まます為に言つちまつたんだよね

「グスン…」

「何で泣くのよ…」

あのあと思いつきりビンタされて俺は部屋の片隅で体育座りをしながら泣いていた。

俺はただ和ませようとしただけなのに…。

「失礼します」

「…つと、来たわね」

ん~?呼んでた人が来たのか。

うはつ www超美人www

つて!~!、このひとは!~!

「突然で悪いんだけどこの一つの護衛、監視をして頂戴『まりも』」

「ここに。」

「どうもー・アスラン・ザラですー！」

ガシツ！

俺はすぐさま立ち上がり、まりもさんの手を握った。

「え、あ、神宮寺まりもです…（モデルの人…？）」

「あ～、まりも～（切り替え早ー）」

「は、はい？」

「まりも～今はいいのよ～」

「で、ですが」

「いいのよ？」

大事なことなので一回言いました。ですね？わかります。

「…はあ、わかつたわよ。で？」の人の護衛兼監視を？」

「ええ。結構重要な人物よ？」

「何が…と聞いても教えられない、か」

「もうこいつ」と

ん～。まさか神宮寺まりもさんだとほ…。

原作を知らない俺でもわかるあの有名な『事件』の被害者か。

でもわかるぞ！B E T Aよー！こんなに美人だったらぱっくりいきたい気持ちもわかる！

やらせないけどね

「では…ザラさん？」

「アスランでいいですよ…。ザラさんなんて語呂呂悪いですしね」

「 わうですね。じゃあアスランさん? 行きました?」

「 はい」

「 あ~ちよつとまつて」

「 俺とまつむせんが執務室から出ようとすると、夕凪さんが止めてきた。」

「 なに?」

「 あんたたちが帰つてくるとき、ハンガーを開けとくからそこに入れてね」

「 ハンガーを…どうして?」

「 アスランにでも聞きなさい。でも、アスラン…言つていってい事と悪いこととどちらわかるわよな?」

「 は、はいににに…」

そう言つた夕呼さんの顔が一瞬般若に見えたのは氣のせいだよね？

-----

「ふう…社？」

「…はい」

「あの野…アスランはどうだった？」

「とても…悲しい人でした」

「もう…」

アスラン…か。

どれだけの物を失つてきたのかしらね…。

-----

「ぶえつくしょん！！」

「だ、大丈夫ですか？」

「イー、風邪でも引いたかな？」

まあ「一デイネイターだから大丈夫だとは思つけども。

「ええ、大丈夫です。それより敬語なんて使わなくていいですよ？」

俺の方が年下なんですし

「え？ いえ、ですが…」

「俺の方が年下なんですし」

大事なことなんで一回言いました。

「はあ……あなたも強情ね？わかつたわ」

「ありがとうございます！」

俺たちは今横浜基地を出て、ジャスティスを待機させていようとここまで歩いている。

結構近くに止めていたのでもうすぐ着くだろう。

「それで？どこに向かっているの？」

「あ～っと、俺の戦術機を取りに……」

「戦術機を？どういふこと？アスランは軍人なの？」

「いや、まあ軍人っちゃあ軍人ですけど……そこそこは」

「それは… 教えられないってこと?」

「まあ、すいません」

「こんないい人を騙すのは気が引けるナゾ、タ呼吸でござるのよ  
はマシだ。」

「別に謝らなくて… も… ー…」

「あ～話している間に『目的地』に着いてたか～。」

「うはつ わきびりくじてるまつもせんカワコス ウウ

「ひんな… 」れは…」

「はい。これが俺の戦術機… NGMF-X19A『インフィート  
ジャステイズ』です」

「これが… 戦術機? こんな、見たこともない…」

「まあ積もる話は後で… とりあえずゴックピットへ」

「え、ええ…」

俺はあらかじめ垂らしておいた搭乗用ゴーグルをまといと掴まってゴシックピットに入った。

この時、まりもさんのおつぱ…ゲフンゲフンが俺に当たつて役得…！とか思っていたのは内緒だ。

「す、普通の戦術機とは全てが違う」

これがゴシックピットに乗つてからのまりもさんの最初の言葉だった。

「あははは…とりあえず俺の上に座つてください。危ないですよ？」

ホントは座なんなくとも安全だがそんな勿体ない事できるか…  
まりもさんのお尻の感触を味わつんじやい…

「え、上に？」

「はい。上元です

「で、でも広いし…」

「上元です」

「大事な」となので三回言いました。

「それに神宮寺さんのような綺麗な女性を怪我させたら末代までの恥ですからね」 爽やかスマイル

「あ、あらがとう…／／／

おー信じてくれたー俺のキモスマ（キモイスマイルの略）にもこや  
な顔しないなんて

どれだけ心広いんですか。

「じゅ、じゅあ…」

そつまつてまつもさんは俺の上元腰かけてきた。

ウッハー！…や、やわっけ～！…だけどたるんでるわけでもなく…。

「…」…いつはおでれえた。まさかこんなにも破壊力があるなんて…。

オ、オラの股間のテポドンが発射しちまうだ！

「お、重くない？」

「…………」

「ア、アスラン？」

「…はつ…な、なんですか？」

「あ、いや、大丈夫かなど」

「大丈夫つす！気にせんでくだせえ」

「え、ええ…（くだせえ？）」

不味い…」のままでは股間が！

急いで基地に戻らねば！

…フツ、認めたくないものだな、若さゆえの過けとは…。

某仮面

大佐

「ではござますよ」

俺はコンテナを持って基地へと急いだ。

### 第3話 漫画版の夕星さんの胸のやかわせ異常（後編）

かなりの駄文だ…。

勘を取り戻さなくてわ！

おかしいところがあつたら指摘お願いします（――）

（感謝の広場）

デステイニアーフランさん、ジュリエッタさん、トルさん、バルコニアさん、七夜さん、マサトさん、トレインさん、感想ありがとうございました！

（元ネタ広場）

逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！

新世紀エヴァンゲリオンより、碇シンジ

やりせないけどね

機動戦士ガンダムSEEDより

クロト・フルのやられなにかどね のオマージュ

…フツ、認めたくないものだな、茹でゆえの過ちとせ…。

機動戦士ガンダムより

シャア・アズナブル

## 第4話 たまにかわいいとしたタイトルをつけたりと書こう

今日は自分でも書いててわけわからなくなっちゃった。

『』挿絵などありましたらお願ひします。

## 第4話 たまにはちやんとしたタイトルをつけようと思つたけど「こな」こと書

「間に合つたぜ…」

なんとか俺は股間の核弾頭が爆発する前に横浜基地に着いた。

事前に夕呼さんが話を通してしてくれたからか、ハンガーには少数の整備士らしき人たち、そして夕呼さん以外いなかつた。

「あそこが空いてるからあそこに入れればいいと思つけど…」

まりもさんが困つたよつに声をあげた。それもそのはず、

なんか夕呼さん含む整備士のみなさんが口を開けてポカーンとしている。

…ああそうか、びっくりしてるんだな。こんな機体見たことないもんな。

俺はとりあえずまりもさんに言われた場所にジャステイスを入れ、コンテナを下した。

「やつぱりみんなびっくりしてるわね？」

「わづですね。ちよつと待つてください、今あけます」

俺はコックピット開閉ボタンを押した。

「イーンとこつ音を上げてコックピットが開く。

その音でせつと戻に返った夕暮さんが二歩三歩で歩いてくるのが見えた。

「じゅあ掴まつてくださー

「ええ

俺は乗つた時と同じようにまつもを抱きかかるようにしてつ

イヤーに掴まる。

やつぱりおっぱい…ゲフンゲフンがある。まずい…鼻出血…  
気合…気合で乗り切るんだ！

「ありがとう、アスラン」

「じゅいたしまじ。それに神面を守るためにじたとえ火の中水の中ですよー（キラッ）爽やかスマイル

「あ、ありがとうございます... 」

「はいはい... 田の前でこちやつかない」

「い、こちやつこじなじこません...」

いつの間にか田の前に来ていた夕呼さんが不機嫌そうに言った。

ところが、整備士が「はい」と口元付いてサラリと敬語を話すまつもせんはせんがだ。

「ふ~ん...まあいいけど。アスラン、これがその...あと、そのコントナは?」

「はい。機体名はインフィニットジャースティスです。コントナは補充パートです」

「調べねむひひひ構わないわね?」

「ええ。といつても多分たいていの事は理解不能ですよ~。」

「分かってるわ…だとじてももしかしたらうつ病があるでしょ。」

「あそっただけだね。」

「或多分ジャスティスのことは調べられたら自分乗らせてもらひえなくなるな。」

「まつも、あんたはうつ病と待つてなさい」

「はつ。」

「アスラン、ちょっときなきなさい」

「え？ あ、はい」

「俺はまつもさんと軽く会釈して、夕呼さんについていった。

「これであんたの事を信じるわ。それであんたの処遇をどうするかなんだけど…」

「…」

「ガクッ）処遇ですか……うん……」

「あんたも白銀と回りじてする？』

武と一緒に？訓練兵からか……。

走ったり、座学したり、走ったり、走ったり、走ったり、走ったり、……。

……一言で言つと、ダルイ

やつぱ、早く戦術機乗りたいしな～。

「うへん……だったらシユミレーターのような物はありませんか？  
そこでは試験でもさせてもらえたる……」

「試験？……まあいいわ」

こうして俺はシユミレーターで試験をすることになった。

たんじやうせん

俺はシミュレーターをするのに必要だと言われて強化装備なる黒いパイロットスーツに着替えたわけだが…。

これはない  
W  
W<sub>o</sub>  
ガチで  
W  
W<sub>o</sub>

普通でいいじゃん！なんてこんな際どい物なの！？

めちゃめちゃ恥ずかしかつたけど、ここでもじもじしていたら始まらない！と、渡されたマニュアルに目を通した。うへえかなり違う……。でも基本は一緒！なんとかなる！と意気込んで筐体に乗り込んだ。

な。……すげえ。かつこいい。これは戦場の絆がおもちゃに見えてくる

『準備はいい？ まりもも見てるわよ？』

「あ、はー…… ってえええーー?」

『どちらの心のオアシス、まりもさんも見とねやつだ。』

「つやー 気合入れんとなー!」

『難易度はどいつさん?』

「よくわかんないんで一番難しいのでお願いします」

『わかつたわ…ハイヴ攻略シユミレーションね。機体は不知火。武装は?』

『武装? そんなに細かいの?』

『うーん…アスランが得意なのは近接戦闘だっけ? まあいいや。』

『適当に近接戦闘系が多いのでお願いします』

『わかつたわ。準備するから少し待ってなさい』

「ウイーす」

セイの言ひて夕呼さんは通信を切つた。

……話し相手がいなくなつたら急に緊張してました。

めつぢや怖い。失敗したら夕呼さんは罵られ、まりもせんには幻滅されんのか…。

嫌だ、かなり嫌だ。そんなことになつたらわしは自害する所存じや。

「（大丈夫かしづ…。）ソワソワ……」

「何よ？そんなに心配なの？もしかして惚れた？」

「う、そ、そんなことないわよー。」

「ふ～ん…まあいいわ。さあ、見せて頂戴、あなたの力を」

『準備できたわ。始めるわよ』

「いいですよ」

遂に来た！この緊張感…しょんべんちびりそう。

でも、腹をくくるしかない。日本のオタク舐めんなー！

「アスラソ・ザラ、出るぞー！」

これが言いたかった！！ 某ガンダムを抱きしめたくなる人

…………

ハイヴとやらに突入するといきなりレーダーに反応があった。

…………キモー！これがBETA？キモすぐるー！

これは…要撃級？「うわーめっちゃいるー！蟻の巣かよー！」

あ～キモイ～怖い～わつかの決意が一気に崩れやる…！

「うなつたら妄想に妄想を重ねた俺の特技なりきり魂だ～」この恐怖を跳ね返すには…

「くつ……くわざえ～B E T A もよお～…」 声が筒抜けな事に気が付いてない

『 』

アリー・アル・サーチェス！！

すると要撃級が「うにに」気が付いたのか、突っ込んでくる。

「あたつかよ～…」

俺は跳躍して回避、そのまま鉛の玉のシャワーを降らせる。

「はは～どうだ？ うめえか？」

弾がもつたいないのでそのまま壁をけり、奥に進む。

奥に進めば進むほど、B E T A の数は異常になる。

もう足の置き場すらない！

仕方ないのでBETAのど真ん中に降り立つ。

すると同時に、攻撃が来る。

「どうがせりちゃん。」

それを軽々避ける俺。

やばいやばいやばいー。もうアダーナリンが出来ちゃってなにも怖くな  
い。むしろ樂しい。

これが戦争をしてる時のサーチャスの気持ちか！！ トリップ中

.....」

「何…これ…どうやつたらいいんか動きが…」

「夕呼ー」

「いいから見てなさいーーー（なんて殺氣…これがあのアスラン？執務室でふざけていたアスランなの？）」

「つ…（アスランは…ジャスティスに乗っていた時の彼はこんな殺氣を出す人じゃなかつた…そんなにBETAに憎しみを持っているの…ー）」「

「イツちまこーなー」

俺は長刀でBETAを切り裂く。

恐らく半分辺りまで来ただろ？ つか？ 武装も残り少ない。

だけど…

「それでこそ殺しがいがあるつてもんだぜーーええーー？ BETAさんよおーーー」「

『『――ツ――!』』

ドガーン!!

要撃級の体当たりがかすり、左腕が持つていかれる。

「しぶてえんだよ!!」

俺は弾を撃つて、そのまま奥に進む。

弾がなくなるのに比例してBETAの数が増えていく。

ガチン、ガチン!

遂に弾切れ、これでもう武装はない。つまり詰み。

くつそー!ひなつたら……。

「ただじゃあ死なねえ! てめえも死ねえ!!」

残った右腕でBETAを殴る。殴つた瞬間に突撃を喰らつ。

……ゲームオーバー。大破。

オワタ……俺オワタ……。

クリアできんかった……。たつた三分の一しか進めんかった……。待つてこるのはタ呼吸さんとまりもさんによるいじめ、か……。

『……御苦労さま。出てきてちょうだい』

「……はい』

うーやっぱりタ呼吸さん怒ってる? やたらむずかしい顔してたで。

俺は鬱になりながらも筐体から降りる。

「……(ただじやあ死なねえ、てめえも死ねえ……か。本当に、どんな憎しみを抱いているのかしら……。それにあの操縦技術は……)』

ウギヤー!! まつもさひまで痛い子を見る田だ~!!

もう死のう……。そうだ……それがいい……。僕は生きてこひやいいけない人間なんだ……。

「アスラン、あなたの力、見せてもらつたわ

「……はい』

俺が死ぬ準備を始めようとするとい、夕呼さんが話しかけてきた。

嫌味ですね？わかります。

「まりも？」いつが今までバレにいたか分かる？

「…わからないわ

「」こつは今まで…そうね、ソ連にいた衛士、アスラン・ザラ中佐

ト

そつそつ。いや～タ呼さんの嫌味は一般のそれとは一線を…え？

え？ソ連？中佐？

：おく。状況把握。ソ連とこつのは違つ世界から来たとは言えないから嘘ね。

でも中佐ってひとあれでしょ？佐直でしょ？お偉いさんでしょ？

「ほ、本当…？」

「うーん。#つわてんわめぐりへるよ。」

「ええ。あんたより階級断然上なのよ」

「…っし、失礼いたしました！ザラ中佐…今までの非礼、お許しください！」

「おー、いきなりびっくりしたあ。まつもせん、いきなりビックリしたの？」

ああ、なるへそ。今まで軽く話してたのが中佐って分かって焦つてんだな。

「いや、いいですよ。それより俺も夕呼さんみたいに「ひつじがたひつじ」とかも普通でいいですよ?」

「い、いえ。」

「お固ー！お固ーですわよおつもせん！」

「しかし……（わよ？）」

「うへえ……じゃあ」ひつまつめ、やねにいひゅうひゅうわせ、階級な  
じで囁び合こましゅう」

「え、ですが」

「ね、神面寺わん? (キラッ) 突やかスマイル

「う、はー、アスラソわん」

「あつがどりゅうれこまかー、神面寺わんー。」

「… やく

「？」

「まつもどう… ーーー」

「ああ… はー、まつもわん」

やべえー、まつもさんかわいいー…、結婚してえーー！

「はあ……むづいい?まつも、あんたもそろそろ訓練始まる感じかな  
い?」

「え、あーではー!アスランさんー・夕呼もー!」

「あ、はー」

「はいはい、わかったから

やつぱり今まで走って行つた。

因みに走っていた後ろ姿のお尻が動いているのを凝視していたのは  
秘密だ。

すると、夕呼さんが不機嫌そうな顔をして話しかけてきた。

「どうしたのよ?まつもに惚れた?」

「一億年と一千年前から」

「?」

「 カウントタ呼さんも大好きです」

「 ・・・」

バシンシ！

「 ハーゲンダッツー！」 断末魔

初のシコミレーターで精神的にキテいるところに、タ呼さんのビンタを食らって俺は踏ん張ることもできず、吹っ飛んだ。

よこ子のみんなは真似しちゃダメだぞ

## 第4話 たまにはちやんとしたタイトルをつけてみたけど、なかなか書こ

……戦闘描写のむずかしさは異常。なら書くなつて感じですけど（笑）

（感謝）

マサトさん、デスティーネ・プランさん、トオルさん、トレインさん、んんん（・・）さん、感想ありがとうございました！

（元ネタ）

これが言いたかった！

ガンダム00より

グラハム・エーカーのこれがやりたかった！のオマージュ。（多分）

シユミレーター時のセリフ

ガンダム00より

アリー・アル・サーシェス

最後に、キャラ設定と第3話を少し変更しました。サーセン。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思う（前書き）

すいません…遅れました。

理由は…スランプです。orz

でも、嬉しい事も！

30000P突破！7'000コニーク突破！ありがとうございます！

ました！！

変な部分や、おかしなところがありましたらどうぞ連絡ください。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思つ

「鬼や……。」

俺は今ジャスティスの〇一二をコピーし、戦術機用に改造している。なんでも俺専用の不知火が配備されるらしい。それにあのシユミレーターを見ていた感じ、既存の不知火が俺の動きについて来れてないそうだ。

そこでジャスティスの〇一二を使うことはできないのか?と言われて〇一二を戦術機用に再構成しているのだが…

シユミレーターが終わったのは1時間前です、初の戦闘です、初めて見た生B E T Aで心が折れそうな心情です、こんな状態の俺にこんなことをさせるなんて夕呼さん、鬼や…。

「どう? どうのぐらいでできたり?..」

とかいつて心の中で愚痴つてると美鬼の夕呼さんが現れた。

「徹夜すれば明日には…。」

「そんなに早くできるのー?」

そんなに驚く…? キラ・ヤマトなんて一分もかからないでストライクの未完成のUを完成させたんだよ? しかも戦闘中に。

「普通では…?」

そうこうとタカラさんが呆れたように

「あなたの世界の普通ってどんだけよ……。」

と言った。

それから約一時間どれだけ「こ」に事が聞かされ、キラヤベHWWWWとか思ったのはまた別の話。

「と」ひるで夕呼さん

「何？」

「俺の不知火つていつ配備されるんですか？」

「早くて明日ね。」

ウツハ！ホントに早い。  
アマゾンもビックリだね！

「ホントに早いですね。」

「ええ、大急ぎでつて言つといったから。あんたは人外レベルだしね  
(操縦技術が)」

「じ、人外ですか……ヒドイ……（キモさが）」

「？」

そこ今まで言つと整備士の一人が夕呼さんを呼びに来た。

「じゃあサボんないでやんなさいよ。あと明日朝食とつたら直ぐにここに来なさい。わかった？」

「……ウイツク」

そう言い残して夕呼さんは整備士の人とともにどこかへ行った。

「さて、俺も頑張るか」

そう言つて俺は夕呼さんから借りたPCにOSをコピーさせて部屋に持ち帰つた。（因みにコピーにかかった時間は5時間）

ついでに言つとなんか変な若造が歩いてるとか思われたのか、人とすれ違うたびに奇異の目を向けられた。特に女性に。それで目が合ふと顔を赤くして目をそらされる。俺の今の顔つてアスランだよね？何？オーラがキモイの？

まあ俺の階級を見て慌てて敬礼してきたけど。

それでも俺の心は綺麗にブレイクされた。

「畠中から懸ふれ女は田舎しよ。」

## 部屋に着いて、作業再開。

最後に見た時計は午前3時を示していた

次の日

10月23日 朝

『今昔物語』(卷之二)

朝、まりもはアスランの部屋の前にいた。

いると思い、起しに来たのだ。

まりもは意を決してアスランの部屋のドアノブに手をかけた。ギイッとゆう音を立てながら扉は簡単に開いた。

音が出たことに少し驚きながらも、中に入ると布団に包まつたアスランがいた。

起こした方がいいわよね…？そつよ…！

と自分に言い聞かせ、起こす為に体を揺わふりついた。

「アスランや…ん…！？」

その時、見てしまつた。

アスランの目に涙が浮かんでゐるのを

「渚あ…渚あ…」

「…」

渚…？人の名前…？

一体…なんで泣いてるの…。

自問自答しても答えは出なかつた。

「…ん…？」

そこまで考えた時、アスランが起きた。

「う、ん…？」

朝、か？早いな…。

それにもいい夢見たぜ！

昨日色んな人に白い目で見られて心に傷を負つた俺はイマジンワールド（現実逃避とも言つ）に逃げ込んで大好きなクラナドの夢を見たんだよね

シチュエーションは渚が他界するシーン。

あれは泣く、ガチで。

…ん？誰かいいる？まさか変態！？お~い、ガチホモレスリングやうＺＥ！って人？

「うー、まつもとー…ビックリーラー…。」

な、なんだよかたまつもとで。轟いたりひつけたりで  
つたよ。

「…あ、いえ、PXにいなーのでもだ癒てるのかと思つて起つて起つて

…

「え…？」

そーっと時計を見る。

ウハッ！ ZE SU GO SU TA ! !

「しまつたああああああああ…！…！」

殺される…タ呼さんに殺される…！

すぐ来いつて言つたのに…！

俺はそばにかけてあつた軍服に急いで袖を通した。

「まつもとさんませんータ呼さんにお呼び出しへつてるので急  
がれますー！」

「ちよ、ちよっと待つてください...。」

ギュッ

俺が走つて部屋を出ようとするもさすが軍服の袖を引っ張つてきた。

仕草がいちいちカワコイなぁ、おー...。

「な、なんですか？」

「あの、聞きたい」ことがあるんですね。渚さんとは誰なんですか？」

「え？」

今何で言つた？渚さん？

……まさか俺、寝言言つてた！？嘘！？恥ずかし！

「え、えっと...渚は俺の嫁です」

「うー」

な、何言つてんだ俺――――此処で言つことじやねえだろ――。  
ほり見ろーまりもさんの顔が何言つてんだこいつ?みたいな顔にな  
つてんじやん――!

「潘さんば……ソ連に?」

「うつよ……?」

元の世界……なんて言えなこしなへ。  
適当にばぐりかしてお」。

「わ……一度と余るな」とソ連こまか。「元の世界でとこつ意味

あ、もうホントに見れないと思つと涙が出てきた。

「……」

チラツと時計を見る。

まずこーまじで時間がない――。

「すこませんー俺はこれで――今のがれてください――」

「あ...」

まりもさんはまだなにか言いたそうだったが、心中でもう一度謝りPICOを持ってハンガーに急いだ。

「（もう…一度と会えないことにいます…。それってつまりアスランさんのお嫁さんは既に…？泣きながら言うなんてよほどの事…もしかしてBETAに！？だとすればショミラーーの時の激しい憎しみも合点がいく…。私はなんてことを聞いてしまつたんだが…。最低ね）」

「…で？言訳はできる？」

俺は今ハンガーにいる。

あの後結局遅れてしまい、土下座をしているとヒビである。整備士の人気が見ていないのは幸運だな。

「申し訳ありません…！」

「はあ…もういいわよ。それでジャステイスのことなんだけど？」

「はい？なんか変でした？」

「変も何も……化け物ね」

「はあ……？」

「光学兵器に謎の白銀フレームによる圧倒的な機動力、ヴァリアブルフェイズシフトによる実弾または打撃系攻撃の無効化、大気圏内飛行能力に普通の核機動じゃありえないほどのパワーの所有に無制限の活動時間、さらには宇宙対応の設定？こんなオーバーテクノロジーもいいところ。あと300年すればあたしたちもつくれるかもね」

うん……。日本語でおk。

とつあんず、かじこひしとで

「……という」とはジャステイスは？」

「当分使用禁止ね。こんな戦場に出したらアメリカがうるさいし、なによりもつと集中的に調べないといけないようだしね」

「だよね」

「とりあえず、あんたはしばらく不知火に乗りなさい。〇九、でき  
たんでしょ？」

「アーリー」

俺がPCを突き出しながら言つて、感心したように夕呼さんは頷いた。

「へえーホントにやるとはね…驚きだわ」

「そうですか？ありがとうございます！それで結局不知火はきたん

ですか？」

「ええ、さすがに急がしただけあって早く着いたわね。案内するわ

-----

「これが俺の不知火か~」

なんか嬉しい。かなり。

自分専用機つてなんか興奮しない?エースになつた気分だよね。

「じゃああと頼んだわよ」

「はい。ありがとうございました」

夕呼さんに礼を言つてから俺は不知火にPCを接続してインストール作業を開始する。

……ぶつちやけ暇だ。インストール作業はコンピュータが勝手にやつてくれるし、俺はただボーッと見ているだけだ。

うーん……だれかいないかな？」

「ん？ あれは……整備士のひと？」

俺の不知火の隣で、カバーをかぶつているジャスティスを10人くらいの整備士と思わしき人たちが熱心に整備……というより調査している。

俺も行つてみよっかな。

不知火から降りて俺は整備士たちに話しかけた。

「あの、すいません」

「あ？ なんだお前……って中佐あ！？ し、失礼しました！」

話しかけた人はやっぱり階級を見て驚いて敬礼した。

「あ、いや普通でいいですよ？ 僕実際ガキですし」

「い、いえ……それは」

「うへん……じゃあ中佐命令ーー」ついつ時だけでいいんで俺に普通に接してください。ね？」

「う、ああ……」

「あつがど「う」れこます。それでどうですか?俺のジャステイス、なんかわかりました?」

「いいや、まだなんも……って俺のおーー?」

さつきからリアクション芸人だなあこの人。

いい人そうだけども。いかにも親方!って感じだな。

そうだ、今日からこの人をリアクション芸人さん、略してリアさんと呼ぼう。

「はー、俺はアスラン・ザラ中佐です。よろしくお願ひします」

「あつがど「う」.」

「くつ？」

俺が自己紹介するとリアさんが急に頭を下げてきた。

「な、なんだ？」

「ほんと素晴らしいものに触れられてるのはお前のおかげだー本当にありがとうございますー！」

「「「ありがとうございますー！」」」

リアさんに続いて他のみんなも頭を下げてくる。

……なるべく、みんな職人気質だからこいつに触れられるのがうれしいのか。

「いえいえ……気が済むまで見てください」

「ああーお前には礼を言つてもたんねえなーなんかして欲しい事ねえか？その不知火お前のだろ？」

して欲しい事？なんかあるかなあ？

専用機……ハツ！

「なら、お願ひしたい事があるんですが……」

「お、うーなんだ？」

「俺の不知火を私色に染め上げる！！」 某〇〇の小物王

「は？」

「間違えた、俺の不知火をジャステイスのカラーと一緒にして欲しいんです」

「なんだ、そんなことすぐやめってやるー！なあ、みんなー！」

「ホントですか！？ ありがとうございますーーー！」

いや、結構ダメもとで頼んだんだけどな。  
こんなに快く引き受けてくれるなんて、とても…嬉しいです…。

「じゃあ、あとお願いできますか？」

「おひー・ませなー！」

俺はインストール作業が終わるまで暇だし、カラーリングするなら邪魔になるとと思ったので、この場を後にすることにした。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思う（後書き）

今日も今日とて駄文祭り！！

サー센、もっと努力します。

（感謝）

マサトさん、んんん（・・・）さん、『テスティーネプランさん、七夜さん、感想ありがとうございました！！

（元ネタ）

俺の不知火を私色に染め上げる！！

ガンダム00よりアレハンドロ・コーナー

「ソレスタークビーイングの武力介入により世界は滅び、統一という再生が始まった。そして私は統一されたその世界を、私色に染め上げる！」のオマージュ

とても…嬉しいです…。

分かる人には分かる。

す”く…大きいです…。のオマージュ

最後に…こんなに伸びるとは思いませんでした!!

皆様にありがとうございます。

## 第6話 ダークサイド（前書き）

「めんなさい！」

諸事情によりかなり投稿が遅れました！  
しかも、短い、雑ともう最悪な出来です。  
とりあえず

「はっ！仕方ねえな！見てやんよ！  
って方、どうぞお願ひします！－

## 第6話 ダークサイド

「御剣冥夜訓練兵ですか」

「あ～、うん……」

俺は今、グランジにて武の部隊の人たちと会話を紹介していくところだ。

……肝心の武はまりもさんに連れていかれたけど。

ハンガーを出て、ぶらぶらしていたら此処に着きその流れでこうなつた、とこうといだ。

だけど、武は俺が中佐になつたことをまだ知らなかつたので普通に友達感覚で

「よつ、アスランー！」

とまつもさんの前で言つてしまつた。

まりもさん

と般若……では生ぬるいよつた怒りの形相で武を引っ張つて行つた。

「それから、あ、あ、またか……。」のよつた空気が流れて普通にスル  
ーで自己紹介を始めたのだった。

うん、みんなすごいね！俺なんてさつきの顔見たら足がガクブルつたもん。

「まあ、気にならない方がいいですよ? いつもの事ですし」

え～っとこの眼鏡っ子は……榎千鶴だっけか。

「はは、 そ う な ん だ。 所 で 敬 語 い ら な い よ」 人 参 い ら な い よ、 み  
た い に

「は？ しかし……」

「おっこいー！あなた達そろいもそろいつておっこですわよ。」

「いえ、ですが（わよ？）」

うんデジャヴ。

それならば、私の権力を使って君を屈服させようではないか！

「中佐命令！公然の場では仕方ないが、こうこうときは敬語を外すこと！復唱！」

「で、ですが

「復唱！」

「う、こ、公然の場では仕方ないが、こうこうときは敬語を外すこと……」

「うん、ありがとう。みんなもそうしてね～」

「はあ……？」

「いいじゃないの。そもそも壁作ってやるよりはさあ？同じ国連軍なんだからさ？」 種死のいい人だったのに直ぐ死んだ可哀想な人

「それも、那儿」

「慧一ー？」

「まあまあー」

「じゃ、じゃあガラガラって呼べばいいんですか？」

えつと…… 1Jの猫みたいになら 1Jにおんなじやのナセ……

確か珠瀬王姫だっけか？

てか思つたんだけどこの分隊つて顔で決めてない？

なんで1Jんなに美少女がそろつてんだろ？

そしてそれに囲まれる武……（マイナス

「あのー？」

「ん？ああいいよなんでも。とつあえずフランクに1Jのー。」

「は、はい！」

危ない危ない……俺の心が暗黒面に墮ちるとこりだつたぜ。

「あれ？ ついやあと一人いるんじゃなかつたつけ？」

「俺の記憶通りなら鎧衣……美琴？ とか言ひ女の子がいたはずなんだ  
けど。

「彼女は今入院中です」

「えつ！ ？ そ、うなんだ」

あ、り、や、り、や……ど、ん、な、子、か、見、た、か、つ、た、の、に

将来武が築くハーレムの住人をなあ！ ！ ！

……いかんいかん！ 俺は暗黒面には墮ちんぞ！ ！ ！  
ダークサイド

リア充氏ね（ボソッ

……くつ！ 此処にいたら俺は墮ちてしまつ！

「こ、は、一時撤退だ！」

「じゃ、じゃあ俺はこれで……武とまつもれ……神宮寺教官こもよ  
みこべ言ひとこてね」

「「「「はーーー」「」「」」

くわー武の奴……。

はつーべ、別に羨ましくなんてないんだからね！

……オーハー自分で言ひて気持ち悪くなつてきた。

「うひ、行くぞー！」

俺は今、シユミーネーターに乗っている。

いや別に武の事が気に食わなくて憂き晴りじてBEEPERのことを殺しに来たとかじゃないよ？

そんな物騒なことするわけないじゃん。

НАНАНАНАНАНА！！

「ふるああああああああーー！」若本さん風に

俺の乗っているのは普通の不知火だ。

まあ、俺のはまだインストールしてると思つ。

つと、考えてる間にも雑魚が来た。

「甘いわあああーー！」

湧いてくる雑魚どもを切り裂いて進む。

「もひとー……熱くなれよおおおおおおおおー……」 修造風

元

まあ、そんなこと言つても1人では限界がある。

どんなに頑張つても、1人で攻略なんてできなー。

中庸、もしくはその手前で何回やつても撃墜される。

そもそも試験の時は完全に追つ詰められていたトコシフリしていたからみんな芸当ができたんだ。

……友達欲しい。

「ふー……」

でもそんなこと言つても楽しいものは楽しいわけで。

『気がつけばもう1時を回つていた。

「うよとやうすぎたなー。体ががくがくだし。」

でも戦場の絆が好きだった俺にとつてみればこのシコリルーターはもはや夢のようなゲームなわけで。

あるよね?ゲームして気が付いたらもう夜やん!…って時。

そんな感じなんだよね。

「じつは二

俺はおつさこくさこ事を言こながいシコリーダーを降つる。

すると近くにいた衛士△さん（女）と△さん（女）が一いちに気がついて駆け寄つてきた。

「じつしたんですか？」

「じつしたもじつしたもあらませんよーーー？」

俺が何の用か聞くと、衛士△さんが期待と興奮の混じつた声をあげた。

「？」

「あ、あの、私達お昼がちょっと過ぎたあたりで中佐がショミーテーに入るのを見かけたんですけど……」

「あ～、わつこえば一時ぐいりこじ始めましたね

「あ、まさかその時間から今までずっとしゃべったんですか…？」

「うん

Bさんの質問に答えると、Aさんが驚きと向やうへわからぬ感  
情のこもった声をあげた。

なんかAさんは、キヤーッ…つづつBさんは、うーん……。  
つて何か考え込んでる。

うん、把握できない。

「あの、俺もう行つていですか？シャワー浴びたいんで

「あ、すみません。呼びとめてしまつて。お疲れさまでした」

「でしたーーー今度いろんな話聞かせてくださいねーーー」

「はい、お疲れ様～（話しづなんぞ～）」

そう言って一人と別れて、俺はシャワーを浴びに行つた。

・・・・・

「……」

「どうしたの？」

「いや……少し神宮寺軍曹に会つてくる

「ふうん……じゃあ、あたし部屋に行くね。おやすみ～」

「ええ、おやすみ……」

「…………（1時から8時過ぎまで）…………単純計算でも7時間以上の

「はい、失礼しました！」

「そり……それじゃあおやすみ

「いえ、私も昨日着任したばかりの中佐とお話をできてよかったです  
す」

「そり……ありがとうございます。」めんねーね、こんなことわざわざついて

「…………とこう」とがありました

ショミーレーションを……常人ならとっくに倒れてるわ。こんな危険な事をするなんて……やっぱり渚さんの事がアスランさんを追い詰めてるのかしら……なんとか私が支えにならなくちゃ……」

今日も勘違いは続く……。

## 第6話 ダークサイド（後書き）

「めんなさい！」

（感謝）

デスティニアーフランさん、トマツチトさん、七夜さん、マサトさん、  
XG-70b 漆之皇さん、佐山・御前さん。どうも感想、じ意見あ  
りがとうございました！！

（元ネタ）

敬語いらないよ

ガンダム0083 STARDUST MEMORYより

口カ・ウラキ

一ンジン、いらないよ

いいじゃないの。そもそも壁作つてやるよつせあ～同じ国連  
軍なんだからや？

ガンダムseed destinyよりハイネ・ヴェステンフルス

長いので省略

機動戦士松岡修造（笑）より松岡修造

そのまんま

～懺悔、もとい言い訳の時間～

さあ！此処まで遅れたわけを話そつじやないか！盛大にな！！

…… サーセン。

## ステップ1、親類の死去により俺、鬱化

ステップ2、  
鬱から復活！…………机の上にある大量の宿題という

名の拷問

ステップ3、ゼミ、ゼミ……や、やつヒオワタ！さあ！続きを……  
なんで！なんでだよ！－何で動かないんだよ！－パソコン！－－  
綺麗なデスクしてるだろ？動かないんだぜ？これ……。

といった具合ですた。ごめんなさい…これからも見てくれるという人にキスがしたいです！！

## 第7話 アスラン・ザラの憂鬱 ～SOSの因縁のわよね～（前書き）

今日は話が一転三転して分かりにくいでしょ。

すいません。

## 第7話 アスラン・ガラの憂鬱～SOGの困難なわがよ～

10月24日

朝 アスランの部屋

「ふあ～あ。……朝、か」

上半身を起こして少しだけ伸びをす。

何とも言えない快感がいい感じに頭を醒ます。

昨日は寝坊してまりもさんに恥ずかしい姿を見られだし、タ呼さんには怒られるしいことがなかつたから早めに起きたのやー。

「うひーじこーしょ……つと」

俺は頭を搔きながら布団から降りる。

傍に置たたんで置いておいた、軍服に手を伸ばしてそでを通す。

うへん……たまには早起きもいいなあ。気持ちいいね。

「よし、今日も一口頑張るか!」

俺はそつ意氣込んでPXに向かった。

「すいません、お隣よろしいですか?」

§PX§

「んあ？……まつもや……神宮寺軍曹？」

DXで合成のあんまりおこしくない食事をひまわりと食べていたら後ろからまつもやに声をかけられた。

「みつしゃあーー！朝からまつもやに会えるなんて今日まじでいるがー。

「ビリビリビリビリ。一人で食べててもつまらないですね」

「あ、ありがとうございます……」

そつこいつまつもやさんは静かに俺の隣に腰かけた。

ああ……僕は幸せ者です。

まつもやんを横田で見つづ、食事を再開する。

なんだかまりもやんが来たら飯がつまくなつてきただぐー！

「…………あの、ザリ中佐」

「はいはー」

食事を再開してから少しあたってまつむさんが話しかけてきた。

「昨日の事ですが……かなり長い時間ショーラーテーをやったそうですね？」

「あ、はい……あの、いけなかつたでしょうか？」

「い、いえーそういうわけでは……」

よかつた。

何の話かと思つてたら昨日の事を向やかに怖い顔で聞いてくるからでつまづ怒つてゐるんだと悟つたよ。

「ただ……」

「ただ？」

「あまつ……無理はしないでください……その……色々想つてつめていた。

「あまつ……無理はしないでください……その……色々想つてつめていた。

る」とは分かつてますが、どうか無理しそぎないでください。……私の勝手な感情ですが、ザラ中佐が苦しんでいるところを見るのさ……とても辛いです……」

「え？ あ、え？」

え……と……どうぞこのことなの？ 状況把握不可能なんですけど。

……つまりゲームのやつ過去世注意ーとこうじとなんですね？

なんとこうお母さん。

こんなお母さんだったら友達に迷惑しきるよね？

「わ、分かりました……心配掛けてすいませんでした」

「えー？ あ、いやーの……私は出過ぎたことを……」

「いえいえー神宮寺軍曹の心遣いに感激しましたーありがとうございますー（キラッ） 爽やかスマイル

「あ、その……もう言つてもいいんだと、嬉しいです……／＼／＼」

やつぱりかわいい……。

まりもさんはこの世界の天使だった件。

綺麗でかわいくて、優しいなんてどうこうこと? 反則だよ。

「ははは。それじゃあさつと食べますか!」

「さつですね」

そう言って俺たちは食べ終わり、まりもさんは訓練へ俺はハンガーへと行った。

「ん？ あ、リアさんだ」

ハンガーに着ぐとリアさんが目に入った。

昨日の不知火の塗装やジャスティスのことについても色々聞きたかったので声をかけることにした。

「すいませ～ん！」

「ん？ おお、あんたか！ ちょっといいことになると来たなー。」

俺が呼びかけると直ぐに気が付いて駆け寄ってきてくれた。

「ううしたんだろう？ なんか嬉しそうな顔してるけど。

「聞け！ あなたの不知火、塗装完了したぜ！」

「なんとー。もうですか？」

「おーーー。」

早い！仕事が早い！！

それにたぶん昨日から置きっぱなしのajsが〇〇Sをインストールし終わってると思つ。

「…………今田から本三は俺の専用機が使えるよ」になんて「」と  
わ……

「おい！大丈夫か？」

「あ、すいません。大丈夫です!」

「 そ う か ？ な ら い い ん だ が 」

「あ、あの！早く見に行きましょうう！――」

「お、おう……付いておな

リアさんは何だか俺の気迫に押されてた様だったが直ぐに踵を返し案内してくれた。

wktk、wktk！

「これが、俺の……不知火」

見上げるとそこには見たこともない不知火があつた。

淡い赤色の装甲。

猛々しい機体。

そして……

「はははー…どうだ？ すげえだろ？」

「……お……お」

「？」

右肩に力強く白で書かれた、正義、の文字。

「ウサギ？」

「あつがとひじやれこめかーーーあつがとひじやれこめかハーーーーー。」

俺は嬉しさのあまり魂の咆哮をして、リアさんの手を取つて激しい上下運動をさせた。

リアさんは俺の手を振り払つたが俺の興奮は収まらなかつた。

「神よ！あなたはまた！私に！幸せを送つてくれるんですね！..」

「おい！ 戻つてこい！」

それから十分後……。

「本当にあつがいがこれこまつた……。」

「はははははー。それで氣に入つてもうれしい頑張ったかいがあつたつてもんだーなあ、みんなー。」

「 」「 」「 」「 」「 」「 」

「 じゅあ早速シロリノーラークンしておまかー。」

「 ねー！頑張んなー。」

俺はリニアさんとの仲間たちに感謝の氣持を述べ、シロリノーラーターへ急いだ。

と懇つたけど「ができた」とを大呼さんと言わなきやうになこと思つたので執務室に急いだ。

「夕呼さん！俺だ～！結婚してくれ～～～！」

「ブツ～～～」「一ヒーを吹いた

俺は執務室に入ると同時にふざけてしまつた。

夕呼さんは「うううのが嫌いと知つていたの」一せつひやつた！

「……」JRのー

「ひでふー」

はい～予想通りいじビンタいたしました！

本当にありがとうございました～！

夕呼さん<sup>が</sup>教育<sup>と</sup>言<sup>いつ</sup>い<sup>ハ</sup>ッ<sup>チ</sup>な事<sup>を</sup>連想<sup>して</sup>しまつ<sup>は</sup>のは俺<sup>だけ</sup>じ

「教育<sup>一</sup>」

「ダメよ。あんたが「ふざけない」と<sup>い</sup>うて<sup>い</sup>い<sup>シ</sup>は教育<sup>しない</sup>とい<sup>う</sup>ね」

俺<sup>が</sup>椅子<sup>、</sup>その上<sup>に</sup>夕呼さん<sup>と</sup>い<sup>つ</sup>構造<sup>だ</sup>が。

俺<sup>は</sup>今夕呼さん<sup>と</sup>話<sup>を</sup>して<sup>い</sup>る。

「はー……あの、謝る<sup>んで</sup>降<sup>つ</sup>てもいい<sup>ま</sup>せんか?」

「く~それで」れから<sup>シ</sup>コ<sup>ミ</sup>ルーター<sup>を</sup>し<sup>こ</sup>行<sup>く</sup>わ<sup>け</sup>ね

やないはずだ！

「教育……はあはあ」

「……逆効果ね」

そういうとタ呼さんは俺の上から降りてソファーに座った。

くそー勿体なことしたー！

「でも悪いけどあたしはシロ／＼スターに付けて添えないわ」

「え？ 何故？」

「忙しいのよ……色々とね」

あ～なるほど、確かにタ呼さんは超重大なことじたんだっけ？

何なのかは知らないけど。

それじゃあ仕方ないな～。

「わかりました。じゃあ一人でやつてきますー。」

「待ちなさい」

「はい？」

シユミレーターをやるために執務室を出ようとしたら夕呼さんに呼び止められてしまった。

「一応その不知火の記録もあとで見たいからあたしの秘書をつけるわ」

「秘書？」

「ええ。今呼ぶから少し待つてなさい」

「はい」

数分後……

「失礼します」

「来たわね」

「んあ?」

俺は暇だったので少し昼寝 と言つては早いかもしけないが  
をしていたが扉の開く音で目が覚めた。

……ウハ! 金髪テラ美人 www

「こいつが頼みたい男よ」

「はあ、わかりました。……イリーナ・ピアティフ中尉です。よろ  
しくお願いします、ザラ中佐」

「あ、アスラン・ザラ中佐です。いかがお嬢様にお願いします。  
あとアスランでいいですよ?」

「は? いやですが……」

「夕呼や～ん！なんでみんな」お固こんですか？」

「お固このは分かるけどまあ軍規だしねえ……まあ、あたしは気にしないわよ。」

「だつてね」

「ですが……」

「よし！分かりました。じゃあ」おこづかとおせは階級無しで行けましょ。まつもさんもせひしますまつこ」

「神廟守軍費も。」

「はい。」

「……わかりました。ではアスランさん、でよひこですか？」

「はい、ピタティフわざ」

「イコーカ、でいいですよ？私もお前で呼んでこるんですし」

「あ、はー。イリーナさん」

よしー話し相手ゲットー

マジドーじこの話し相手が少ないからいつも人ができるのは嬉しいなあ。

「では行きましょうか、アスランさん」

「あ、はー。じゃあ夕凪さん、また！」

「はいはー、精々頑張んなさい

俺は夕凪さんに敬礼してイリーナさんと一緒に行った。

「ふふふふふ……行くぞ、やつてやる、やつてやるよー。」

俺が今乗っているのはジャスティスの〇〇を載せた淡い赤色の不知火だ。

……不知火だけじゃ味気ないな。なんか他に名前つけよっか。

何がいいだろ?うーん……。

……不知火カスタムでいいや。考えるのめんどくさいし。

「それではザラ中佐、準備はよろしいですか?」

「はい」

「それでは始めてください」

「アスラン・ザラ、不知火カスタム、出るぞーー!」

俺は始まつてすぐにハイヴに突入した。

もう見なれた面々が盛大に歓迎してくれる。

ちなみに俺の武装は突撃前衛ストーム・バンガードと言つらしい。

「喰らえ！」

撃ちすぎないようができるだけ目の前のB E T Aだけを撃つて進む。

……みんな、聞いてくれ。

不知火カスタムテラつよすwww。

なあにこれゝ。某カードゲームの王様の光の方風に

普通の不知火の反応速度が1だとすると、不知火カスタムは10位だよ？

異常です。もう機械を扱つてるとかそんな感覚はない。

ただ手足を動かすような感覚で機体が動く。

いや、それよりも動く。

まさかOS一つでここまで変わるなんてびっくりしました。

『イリーナ・ピアティフ

「アスラン・ザラ、不知火カスタム、出るぞー！」

アスランさんがそういってシミュレーターを開始した。

初めてあの不知火を見たときは驚いた。

だけビシュミレーターの内容はその時の驚愕を遥かに凌駕していた。

「喰らえー！」

決して撃ちすぎず。

撃たなさすぎず。

その状況判断も確かにすげかった。

「いのー！」

それでも、この動きのすぐ前の前ではかすんでしまった。

踊っているかのように滑らかで華麗な機動。

相手のBETAが可哀想になつてくるほどに攻撃が当たらない。

不知火の装甲を着た人間が動いているんではないかと錯覚してしま  
うほどの動き。

それを苦しい顔もせずに軽々とこなすアスランさん。

この人がいれば……！

そう思わずにはいられなかつた。

§イリーナ・ピアティフロウ

「そりー。」

弾がもつたないので武器を長刀に切り替え、BETAを切り裂き  
ながら奥へと進む。

やつぱり相手が血が出る奴で実体剣だとだんだん切れなくなつてく  
るのがめんどくさいな。

愚痴りながらも進む。

『前方より要撃級多数接近』

「了解！」

うーん。やつぱり一人よりいいね。

頑張れる！

前方から来た敵を邪魔な分だけ切り裂いて進む。

進んでいる最中、遂に長刀の一本目が折れた。

すかさず一本目を手に取り切り裂く。

ちなみに、今半分以上進んで被弾数〇です。

だけどもつ武装がないお。

「しようがない……まつがーれ」

俺はそう言つて自爆ボタンを押した。

昨日友達に

「長刀って片手で使えんの？」

って聞かれて「え？」ってなりました。

分かる人助けて～！

注 作者は最初に書いてあつた通り知識曖昧です。

（感謝）

佐山・御言様、デスティニー・プラン様、ゴーローン・テストロイ様、  
まぐる様、マサト様、七夜様、とらふぐ様 感想、メッセージあり  
がとうござります！

（元ネタ）

なかつたと思います！

次回も見れる人だけ見てね！

## 第8話 緊張すると自分でも何言つてるかわからなくなる時つてあるよね? (前)

遅れてサーセン。

ひどい駄文です。ダメな人はまわれ右してください。

123,028アクセス 24,307人 突破! ありがとうございます!

## 第8話 驚張ると自分でも向かうべかわからなくなる時があるね?

「中々いい感じだと思つたんだが……」

俺はやつはシコリーナーから降りる。

今の中コリーナーの結果は最深部一歩手前。

……凄くない? 一人でだよ?

「アスランやん! -! -

するとイリーナさんがこちらに駆け寄ってきた。

「どうしました?」

「どうしました? じゃありませんよ! -! 単騎で、単騎でですよ! -! -! 単騎でハイヴを此処まで進むなんて……歴史的快挙ですよ! -? これは! -! -! -

「おおふ……」

おと少しもちつゝつか。

おかしいですよ、イリーナさん……（トーンショーンが） 某年上キャラのエコータイプ

「じゃあ、もう一回やつましょつか？」

「はい。」

やつこつて俺はショミーノーターに再度搭乗し、再開。

結局その後も最深部にあと一歩とこりとこり何度も失敗。  
もつとやりたかったけど朝、まりもさんに注意されたのでやりすぎ  
なこよしお皿で止めた。

「イリーナさん、今日はありがとうございました」

「いえ、こちらも素晴らしいものが見られて大変有意義な時間でした

「はははは……じゃあまた今度お願ひしてもいいですか？」

「 もういいですか。 いつからもお願ひして頂いていましたー。」

「 じああ、またお願ひしますね」

「 はー。」

やつこって俺とイローーさんは別れた。

10月25日

「うへん、美味くない」 まづいとは言わないこれ、大事

何度食べても慣れるもんじやないな。

ああ、元の世界の「」飯が恋しい……。

「ザラ中佐、」「一緒にしてもよろしいですか？」

「あ、神富寺軍曹。エーリック」

「そんな」と思つていたら昨日に引き続き、まつもさんに戸をかけられた。

「どうですか？ 武たちは？」

「いいですよ。飲み込みも早いですし……ですが白銀はなんだか兵役を受けていたような気がするんです」

まあ、受けましたもん。前の世界で。

……とは言えないので知らないそぶりをしなきやね。

「……と、聞こますと?」

「教えていないはずの生身と戦術機の射撃のタイミングの違いや、自己鍛錬では済まないような体力などあれば数え切れません」

「なるほど……」

テラヤバスwww。

フツーに武の努力にびっくりだわ。

「何か知っていますか?」

「いえ……すみません」

「い、いえ! そんな謝つていただくことではー!」

「まあ、武も武なりに考えていろ事があると思ってますんで」

「そう、ですね……」

まりもさことそんな話をしながら食べていたら、あつとこいつ間に時  
間が来た。

「神宮寺軍曹、すいません。俺、これから夕呼や……副司令の所に  
行かなきゃいけないんで失礼します」

そう、俺は今日も夕呼さんにお呼びだしを喰らったのだ。

多分、昨日の事に着いてだと想つんだけど。

「あ、はー。」

「じゃあ、訓練頑張つてくださいね。神宮寺『教官』

「ふふふ……分かりました」

やつぱり、俺はMAXを後にして執務室へ向かった。

「夕呼さん！ 僕だ！ 結婚し……ぶざり……」

「ふ、読んでいたわ」

あ、ありのままに今起つたことを話すぜ！

『二つものように夕呼さんに求婚しようとしたらい、二つの間にかビンタされていた』

な……何を言つてこるのかわからねーと思つが、俺も何をされたのかわからなかつた……。

頭がどうにかなりそうだった…トラップだと監視してたとか、そんなチャチなもんじやあ断じてねえ。

もっと恐ろしこ女の感つてやつの片鱗を味わつたぜ……。

……まあ、要約すると夕呼さんが俺がふざけるのを読んで待ち伏せしてたって話。

「ひ、ひどい！ 親父にもぶたれることないの」「……」 某初代一  
ユータイプ

「……どんだけ親バカなのよ」

「ちよ 〜〜マジレス勘弁 〜〜」

夕呼さんはそうこうとソファーに座った。

そして「一ヒー」を左手に持ちながらじつに言つた。

「昨日のショミリーナショーンの結果、見せてもらつたわ

「……どうでした？」

俺がそう聞くと、夕呼さんは一呼吸置いて

「あんたホントに人間？」

と、人の心を抉る一言を言つてきた。

「人間ですよ！」

「まあ、それはどうでもいいわ

「どうでもいいんかい！！」

「あ？ タメ口？」

「サー！ すいませんでした！！」

もうやだこの人。

なんなの、一体。

「ま、冗談はさておき……今日呼んだ理由だけ……次は対人戦のデータがほしいの」

「はあ……そりゃなんでもまた」

「念のためよ。一応、データを集めなきゃなんないの」

「おく、把握

あ、でも対人戦って俺生まれて初めてだわ。

「それで、一体誰が相手をしてくれるんですか？」

「これからそこいらにあんたを紹介しに行くから付いてきなさい」

「はーい」

そう言つて部屋を出て行つた夕呼さんの後に着いて俺は執務室を出

た。

「だつて今貸し切りにしてるもの」

「あの～夕呼さん？」

「なに？」

「誰もいないんですけど……」

俺は夕呼さんに連れられショミンターラームに来ていた。

先に着替えておけと言われたので強化装備を装着してきただんだナゾ

「誰もいない。

あるえー？」

「だつて今貸し切りにしてるもの」

「へへ。でも、その相手は一体どじこじるんだす？」

「もうすぐ来るわ」

「ちなみに……男ですか？女ですか？」

「女よ」

「オーマイゴット…！」

「なんてこいつたい…！」

「……みんな聞いてくれ。もう俺の性格は分かってると思ひ。こんな奴なんだ、俺は。」

「そんな俺が……女性衛士の強化装備を直視できるわけねえだろお…！」  
某御大将

「今までにはなんとか見ないよ」してシユミューターに駆けこむ事が出来たけど今日はまずい…！」

紹介するつてやつを夕呼さんが言つてた。

つまり俺は強化装備を着たその女性衛士と話をしなければならないところだ…！」

「…………（こいつ、何難しい顔してるのかしら……。いつもそうだけど、シミュレーターをやるときはこういう顔になるわね。ずっとこういう顔してれば格好はいいんだけどね……）」

やばいやばいやばい！

落ちつけ俺！ 深呼吸だ！

スーツ、ハーツ、スーツ、スーツ、スーツ、スーツ、

……ゲホガハゴホ！？

「お、来たわね」

「来ちゃいましたか……」

夕呼さんが見ている方向を見ると、10人ほどの女性衛士がいた。

しかし、強化装備を着ていたのは一人だけだった。

その2人と1人軍服を着た女性衛士はこちらに気がつくと直ぐにつちに来た。

「お待たせしました！ 副司令ー！」

「いいわよ

2人と1人軍服を着た女性衛士は俺とタ呼さんの前に来ると敬礼をし、挨拶をした。

「アスラン、こいつらはあたし専用の特殊部隊、A-01部隊よ。  
伊隅」

そういうと強化装備を着た大人っぽい女性衛士が前に出た。

「はい。私は伊隅みちる大尉であります。A-01部隊の部隊長を務めさせていただいています」

「あ、自分はアスラン・ザラ中佐です」

「…………は？」

「アスラン・ザラ中佐です」

「アスラン、伊隅たちはこの前任務から帰つたばかりだからあんたのこと知らないのよ」

「はあ、セツですか」

俺が夕呼さんの言葉に答えた時、

もう一人の強化装備を着た女性衛士が大声をあげた。

さらに軍服を着た人も目をまん丸くしている。

かわいい！  
ブロリー風

「ええ、そうですね。」

「し、失礼しました！！

そういうと伊隅さんはすぐおめでたしを敬礼をしてきた。

もうワンパターン。

「いいですよ。それよりそっちの人は？」

「……私は速瀬水月中尉です。B小隊小隊長を務めています」

「わ、私は涼宮遙中尉です！ 戰域管制を担当しています！」

「……そういうわけよ。これから伊隅と速瀬対アスランでシコミレーターをしてもらつわ。伊隅と速瀬のオペは涼宮、アスランはあたしが担当するわ」

……え？ 2対1？

なんていじめ？ これ。

てかそろそろ俺の股間が爆発するよ？

「あの～？ その若わり中佐ってことはかなり強いんですね～？」

「え？」

「み、水月！？」

「速瀬ーーー！」

何々？ どうしたの？

なんか2828して速瀬さんが言つてきただけど。

え？ もしかして喧嘩売られてる？ なして？

「まあ、速瀬の言いたいこともわかるわ。こんなガキが中佐やつてんのが信じられないんでしょう？」

「まあ、やうなっぢやこますねー」

「速瀬ーーー！」

夕呼さんの口調に同意する速瀬さん。

いやいや君たち、そういうことは本人のいないところで話やつか。

「すいません。ザラ中佐。速瀬にはあきらかと黙つておきますので」

「いや、いいですよ。それにホントに俺はガキですし。伊隅大尉も

俺に敬語使わなくてここですかよ~。」

「はー? こやしかし……」

「まあまあ。中庄だつてやつてなんですかからこここじめなこですか

~

「速瀬……お前とこいつは……

「まあまあ……落ち着いて

「あ、あのー、水月に悪氣はないんですけどー!」

「こやこや……涼風やんさん。

速瀬さんに悪気以外の何があるんですか?

そりへん小一時間話しかけたいんですけど。

……なんて言ひつけがややこくなつて、俺の股間のテ・ボ・ド・ンが爆  
発したりシャレにならなから言わなこであー。

そんなこなあつて、やつと模擬戦を始めたといひま

で口をつけた。

……いやね？ もう疲れたよ。

『それじゃあ始めるわよ～？』

「いいですよ」

『まあ、精々頑張んなさい』

俺はこの時、初めての戦術機による対人戦だといつ事で緊張していた。

だから、

「……タ呼さん。一瞬たりとも田を離さないでください。どれだけこの世界の衛士の質が低いか見せてあげます」

『！』

自然にお口が動いたやうんだ

某ファーストフード店の道化師

『……タ呼さん。一瞬たりとも田を離さないでください。どれだけこの世界の衛士の質が低いか見せてあげます』

「！」

さつきまであたしや速瀬にどんな事を言われてもアスランは笑っていた。

だけど今はどう？ 瞥むだけで人を殺せそうな眼をして。重く静かな声で淡々と話す。

アスランの機体、ジャステイスはあたしたちの世界では辿りつけないような性能を持っていた。

あんな技術があるという事は必然的にアスランの世界の、戦争の質も高いはず。

そんな世界で一度の大戦を生き残った。

社は言つてた。の人、アスランの周りの人はほとんどがもういな

い、と。

つまり、死。

「失ったものが違う……ってことかしらね……」

あたしはそう呟いて、模擬戦が始まるのを見ていた。

§番用夕呼。うた§

『状況開始!』

涼宮さんの声が上がると同時に速瀬さんの不知火が走つてくる。

そしてその後ろから伊隅さんが弾を放つ。

これ、なんて無理ゲー？

「（あいつの不知火……確かに不知火力スタムって言ったわね。あんなの私が落してやる！）」

「な～んて思つてんだらつな～速瀬さんは

俺は一気に水平噴射をして間合いを詰める。

「な～!? 馬鹿なの!!?」

速瀬さんがそいつに殴つ。

まあ馬鹿だよなあ。何にも装備せずに突つ込むなんて。

「 もひつたーー!」

速瀬さんはそいつに手に持つた長刀を振り下ろしていく。

これで決めるつもりなのか大振りだ。

……すると思つたよ! 速瀬さんの性格な～りとあ～!!

「 !? 速瀬! 迂闊に大振りをするな! ザラ中佐は何か狙つて

伊隅さんが何か言おうとしてたけどもう遅い。

「当たり前よ……」

「えーーー？」

速瀬さんの長刀が振り下ろされる瞬間、俺はバク宙でその長刀を避けた。

そして着地の瞬間に水平噴射しながら背中の長刀を手に取る。

「喰らえーー！」

「きやあーー！」

そのまま長刀で速瀬さんの不知火の両脚を斬る。

そしてすぐさま後ろを振り向いて長刀を振り下ろし

「終わりだーー！」

速瀬さんの不知火の両手を斬り落とした。

ダルマの完成だ！！

『え、あ、え？ は、速瀬機。致命的損傷……大破』

涼宮さんのテンパってる声が聞こえる。

まあ一瞬だったしね。

伊隅さんの援護も間に合わないほどだったし。

「は、速瀬え！ ……このー！」

「おつとー。」

伊隅さんが弾を放ちながら横に移動する。

俺はそれを後ろに跳びながら避け、長刀をしまい銃を手にとつて弾を放つ。

「はああああああああーー！」

すると伊隅さんは片手に長刀、もう片方には銃を持ち弾幕を張りながらじりじりに向かってきた。

……なら俺も！

「（なー？）ちりが弾幕を張っているのに突っ込んでくるだとー。  
ー？）」

俺は伊隅さんの放つ弾幕の中に突っ込んでいく。

傍から見れば自殺志願者だなあ。俺って。

まあショミレーターだから死なないけど。

「狙い撃つ！」 某イケメンスナイパー

「ー？」

俺は弾を伊隅さんではなくその足元の地面に向けて放つ。

すると砂煙が起き、一瞬だけ伊隅さんの視界を奪う。

伊隅さんは俺を近づけまいと弾幕を張るのをやめない。

「へー、

馬鹿め！ 素直に下がればいいものを！－！

「喰らえい！ ナアアイフ！－！」

そこに俺は短刀を投げる。

そしてすぐさま跳躍し、伊隅さんの後ろに回り込む。

「く、このー」

直ぐに短刀が弾かれる音がする。

だけどその音でどこにいるかわかつちゃうんだ

「俺が…不知火だ！－！」 某ガンダムフェチの少年

「な、に！－！」

俺の不知火と伊隅さんの不知火が交差する。

そして砂煙が晴れる。

『…………伊隅機。致命的損傷、大破…………』

そこにはコックピットしかない不知火が転がっていた。

「 yes I can」

結局模擬戦は俺の勝利で終わった。

## 第8話 緊張すると自分でも向かってゐるかわからなくなる時つてあるよね? (後)

もつ、ね? もう一回ゲームを買いたおそつか迷つてこる今日この頃。  
てかこの時期にA-01が横浜基地にいたかすらも謎。いいよね。  
「都合主義で。

あと死ぬばずの召無しさと達ばどいつみつこない事にしていいかな?

ダメならだれかアイディアくださいな。

それともう一つ速瀬さんを落とした時の動きはガンダムSEEDの  
フリーダムの動きの真似です。

（感謝）

佐山・御言様、ほんぢょー様、三平様、この世全ての悪様、デス  
ティーネー・プラン様、マサト様、妖様 感想、質問への返事、あり  
がとうございました!!

（元ネタ）

おかしいですよ、イリーナさん！（トントンショーンが）

機動戦士Ζガンダムより ウッソ・エヴィン

おかしいですよ、カテジナさん！

あ、ありのままに（ry

ジョジヨの奇妙な冒険第三部より ポルナレフ

あ、ありのままに（ry

女性衛士の強化装備を直視できるわけねえだろお！

ガンダムより ギム・ギンガナム

忘れたお

自然にお口が動こちやうんだ

機道化師ドナルド！より ドナルド・マクドナルド

自然に体が動いちゃうんだ

狙い撃つ！

機動戦士ガンダム00より ロックオン・ストラトス

俺が…不知火だ！！

同じく00より 刹那・F・セイエイ

俺が…ガンダムだ！！

## 第9話 悪友（前書き）

遅くなつたが大丈夫か？ 大丈夫だ、問題ない。

## 第9話 悪友

「うん、楽しかったー。」

俺はシユミン・タ・から降り、背伸びをしながら言った。  
忘れてたよ。アスランの本領はMS戦、つまり対人戦だということを。

「…………」

「…………お見事です。中佐。まさかここまでとは…………」

「いやー、機体がよかつたんですよ。伊隅大尉もお見事ですよ」

「いえ、あの機体をあそこまで動かせるなんて中佐の技量有つてこそです」

俺が降りると直ぐに伊隅さんと速瀬さんが降りてきた。  
伊隅さんは少しショックを受けた顔をしていたがなんとか話せるようだ。

だけじ速瀬さんは俯いて唇を噛み締めてゐる。

するとその後ろから夕呼さんと涼面さんがやつてきた。

「うあ、中佐、お見事でした……（せひ、水田もやしあとじて…）

「いえいえ～

「……たは……のよ……一

「？」

「あなたは……のよ…」

「速瀬さん？」

「……あなたは何で私に何も言わないのよ…？ 笑えばいいじゃな  
い！ あんな大口たたいといて、直ぐ落とされて！ 口だけの力の  
ない奴だつて！」

「な、は、速瀬！…？」

「み、水月！？」

え～～～。

なんかいきなり速瀬さんがキレた。

何故にいきなり怒つてんの？ 僕なんかした？

「あの、何について笑えばいいんですか？」

「 ！」

俺がそう聞くと、速瀬さんは走つて逃げだした。

なぜ逃げたし

「あ、み、水月！… すいません私追いかけます！」

「あ、こら待て！ 速瀬！ 涼宮！」

「放つておきなさい伊隅。速瀬の事は涼宮に任せとけなさい

逃げ出した速瀬さんを追つ涼宮さん。

そしてその一人を追おとした伊隅さんを夕呼さんが止めた。

「しかし……」

「いいから。あんたは他の隊員たちと反省会でもしてなさい」

「……了解しました」

そうこうと伊隅さんは俺と夕呼さんに敬礼して他の一緒に来ていた人たちとどこかに行ってしまった。

……え？ なにこれ俺のせい？

「まつたく……で、どうだった？」

「なにがですか？」

「伊隅と速瀬よ。あんたから見てあの一人はどうだったの？」

伊隅さんと速瀬さんか～。俺から見たら一人とも凄い強いよな～。  
俺はホラ、ズルだしね。

「強かつたですよ?」

「……本当に言つてゐるの?」

俺がそう答えると夕呼さんは少し厳しい顔つきになつてそう言つた。  
え、まさか夕呼さんまで『機嫌斜めですか?』ということなの……。

「あの、夕呼さん! 僕腹減つたんでシャワー浴びて昼飯食つてき  
ます! チヤオ!」

「あ、待ちなさい……!」

この空氣は本当に無理。とこいつとで俺は逃げる事にするぜー。

「めんよ、夕呼さん。

「…………（あれだけ一方的に瞬殺しといて『強かつたですよ?』  
か……皮肉を込めているのか、それとも呆れられているのか。どつ  
ちにしても始めるときにあんな事を言つておいてその後にこの言  
葉つてことは……アスランがこの世界を救う事を諦めるかも知れな  
いわね。それだけは絶対に阻止してみせるわー）」

ショミレーターム 午後

「あ～…………」

俺は今、ヒジヨ～～に困っている。

え？ 何故かって？ 速瀬さんがいるんだもの！  
どうしたのあの人！？ 人殺すような眼をしてるよーー！  
こうなつたら……

「ひづらスネーク。これより潜入する」

目標は速瀬さんの向こう側にあるショミレータームだ。  
ほふく前進、ほふく前進つと……。

「あー いたー！」

「ですよね」

そりゃ見つかりますわ。

「中庄一也、つい一回私と勝負してー。」

「だが断る」

「な、なんですかー。」

「だって午前やつたじやないですかー。速瀬さんは俺にキレつぱつ  
か行つちりますし」

「あ、あれは……」

いやー。だが断るは完全にノリで叫んでしまったよ。  
俺的には全然オッケーなんだけど。

「……わかりました。せつまじょひ」

「え、ここなの?」

「ふむ、見せてもらひおつか国連軍の性能とやらを」

某仮面大佐

「今度こそ勝つてやるわーー！」

今の俺の言葉に「今更！？」と突っ込まないとわ……。

?（馬鹿という意味）なのか純粋に燃えているのか。恐らく後者。

そつこつわけで模擬戦開始。

「甘いー。」

「あやあー?」

一勝。

「横ががら空きだー！」

「二つの間に……ああーー！」

一勝。

「ガトチュエロスタイル！！」

「な！」

三勝

「頭がパーン！」

「た、短刀で！！？」

四勝。

— active! —

「ランランルーーーー！」

あつという間に五勝した。

「はあ……はあ……こんなにやつて一撃も入れられないなんて……」

「…………」

なんか最後速瀬さんも言つてた氣がするけど大丈夫か？ 大丈夫だ、  
問題ない。（自己解決）

「私じゃ……勝てないの？」

「……」

速瀬さんが弱氣に！？ いかん、これはマズイ！  
こつなつたら最高に熱い男になりきつて速瀬さんを『元氣づけなくて  
はー！

「あきらめんなよー！」

「え……」

「諦めんなよ、お前…… どうしてそこでやめるんだ！？そこで…！ もう少し頑張つてみてみるよ！ ダメダメダメダメ諦めたら。周りのことと思えよ！ 応援してる人たちのこと思つてみるつて…！ あとも「うなづく」とのところなんだから。 僕だつてこの疲れた体のところ、しじみがトゥルル…… ゲフングエフン、もつと強くなろうつて頑張つてんだよ！ ズットやつてみる！ 必ず目標を達成できる！ だから」*Never Give Up…!*

松岡修造！

俺はこの世界…… いや向こうの世界か。 とにかく彼ほど熱い人間を俺は見た事がない…！

「そう、よ。私は負けない…！」

お、いい感じ！ あとひと押しか！

「がんばれがんばれできるできる絶対できるがんばれもつとやれるつて…！ やれる気持ちの問題だがんばれがんばれそこだ…そこだ！ 諦めんな絶対にがんばれ積極的にポジティブにがんばれがんばれ…！ 北京…… ゲフングエフン、俺だつて頑張つてるんだから…！」

「私は…」

「俺は…」

「Never Give Up.」シャキーン！

決ました……。この上なく決ました。  
とにかくよくこれだけ覚えてたな。

「もう一回やるわよ！」

「合点承知の助！」

俺たちはシミュレーターに駆けこんだ。

「行くわよー！」

「来いーー！」

この日、俺は初めて対人戦で被弾を経験した。

## 第9話 悪友（後書き）

（感謝）

佐山・御言様、デスティニー・プラン様、この世全ての悪様、マサト様、とらふぐ様、七夜様、アルベルト様。感想、ご意見、リクエストありがとうございました！

これからもよろしかつたらお暇なときにでも田を通してやってください。

（元ネタ）

需要があるか分からないんで今回はカット。  
また書けという人がいたら書きます。

（一言）

おかしなところあつたら報告お願いします。

これから2週間前後、テスト期間なんぞさらに投稿が遅れます。サーセン。

中国のせいで俺の寿命がストレスでマッハ何だが。（美鈴の事じやないよ？）

## 第10話 野生のアスランが現れた！（前書き）

つかれたお・・・

これで1ミリは文章力が上がつていればいいな～と思つザ・ワーナン  
軍曹なのでした。

## 第10話 野生のアスランが現れた！

10月26日 朝

アスランの部屋

「あ～、ねむ……」

俺はいつものように少し伸びをしながらそつ呑いた。

いや～、それにしても昨日までいたよ。速瀬さんの気迫に。

被弾を恐れずに攻撃していくなんてね～。そのせいで驚いて俺が被弾しちゃうじ。

確かに実戦じゃしからやいけない事かもしれないけどそのぐらいの気迫はあつてもいいよね？

そうして血口解決して俺はマックスへと向かった。

「あの、ザラ中佐……折り入つてご相談があるのでですが」

「はい？ なんですか？」

いつものようにPXSでまりもさんと朝食を取つていたらまりもさんがそう切り出してきた。

「私に戦術機の戦闘指南をしていただけないでしょうか？」

「……何でまた？」

「昨日の事を聞きました。伊隅大尉と速瀬中尉の一人をたつた一人で倒したと……。あの二人は国連でもトップクラスの衛士なんです。その二人を倒したザラ中佐は間違いなく国連最強クラスの衛士です。

……私もまだ強くなりたいんです！ そしてBETAを倒したいんです！ 私も戦場に出るときがあるでしょう。その時にも「誰も失う」とのない力が欲しいんです！」

「…………」

まりもさんはテーブルから身を乗り出してそう言つた。

なんという熱意。すごいね～この世界の日本人。大和魂があるつて言うか……俺の時代の奴ならこんなときでも死にたくないから戦場に出たくないとか言つんだろうな。

やばつ、感動して涙出てきた。つて、あれ？ なんか口が勝手に……

「……失われたものは絶対に帰つてはこない」

「――！」

「友人も、恩師も、家族も……みんな」

「ザ、ザラ中佐…………」

やべえ……中2病が発病したかとオモタ。

これ、アスラン本人が喋ってるんだわ。頭の中に記憶が流れ込んでくる。

てか、アスランは意識があんのね……。何それ怖い。

でもなんていうか、邪魔ではないんだよね。一体感があるって言つか……。

……だけどさあ、いきなり出でてきて話すのやめてほしーな~。  
ほら、まつもわん顔真っ赤にして涙田だよ。完全に笑うのこらえてるよ。

ん？ お、やつと喋れる！

「あ、えっと……それを失つことのないことに頑張る神富寺軍曹に心打たれました！ 僕でよければこいつでも付き合こますよー。今田なんてどうです？」

「…………わかつました。では私はお先に失礼します…………」

「え、あ、はい」

「それでは……」

そのままで走りと走るに近い速さでまつもわんは行ってしまった。

そんなに中2病が面白かったんですか？……今頃大爆笑してんだ  
ろうなあ。鬱だ。

「あ、いた！ 中佐、今日も私の相手してよね！」

「ちょ、水月！ 中佐、おはようございます！」

俺がそう思つてこると悪魔速瀬さんと天使涼宮さんが現れた。

「……不幸だ」 某フラグメーカー

「はあ……はあ……」

私は神宮寺まりもはアスランさんと別れてすぐにトライレに駆け込んだ。  
分かっていたはずなのに……。

『……失われたものは絶対に帰つてはこない』

アスランさんにそういう話をしてはいけないと分かっていたはずなのに……！

『友人も、恩師も、家族も……みんな』

渚さんだけでなく全てを失っているなんてこと……家族の話や友人の話をしない事から容易に分かっていたはずなのに！！

最低の人間ね……自分の事しか考えない最低の人間だわ。私。

「すいません……アスランさん……グスッ。私は……私は……！」

私はしばらく一人で泣き続けた。そうすれば許してもらえるような気がして。

「よし、準備はいいですか？」

今は夜。場所はシユミノータールーム。  
俺 アスラン・ザラ は向こうに乗つているまりもさんに声を  
かけた。

『はい。いつでもいいです』

俺が聞くとまりもさんは真剣な面持ちでそう答えた。  
……どうやらかなり気合が入っているようだ。

「では、ウォールク・データ始めますよー!」

『了解!』

始めると同時に俺とまりもさんの駆る不知火はハイヴに突  
入した。

俺が先行しまりもさんが中へ遠距離を取るフォーメーションで。

「まりもさん! 前方からBEETA! 行きますよー!』

『了解!』

俺はまりもさんの返事を聞くと一気に水平噴射をしてBETAの大群に突っ込む。

そしてそのまま長刀を取り出し、一体の突撃級を切り裂く。

『援護します！』

まりもさんはそう言うと銃を撃ちながらこちらに走ってくる。それに気を取られたBETAを切り裂く。

「まりもさん！」のまま目の前の敵だけ潰して極力武装の消費を避けましょう……！

『了解しました！ 先行はお任せします！』

まりもさんの返事を聞いて俺は不知火力スタムを前に向けた。

すじい……と、私 神宮寺まりも は思った。

圧倒的な機動、そして操縦技術。  
一体今まで私が見てきた衛士は何だつたんだろう?  
そう思わずにはいられなかつた。

『まりもさん！ 前方よりまたBETAの大群！！』

「え、あ、了解！」

アスランさんの声に反応する。

するとアスランさんはまた水平噴射をして単騎で敵地のど真ん中に躍り出る。

……正直、私はいらない気がする。

そんな事を思えるほどに華麗だった。

ネックなのは武装の量。

多分、一機か二機位の補給専用の戦術機でも作れば直ぐにハイヴを攻略してしまつのではないか？

その考えは、素直に憧れと尊敬の意であつた。

『まりもさん？ どうしました、どこか不具合でもございましたか？』

「あ、だ、大丈夫です！」

アスランさんの駆る不知火カスタムは未だBETAの大群に囲まれている。

その中でこんなにも余裕を持つて私の気遣いをする。

……どうしてここまで違つのか？ どうしてこんなにも強いのか？

失つてきたものが違う。

背負つてきたものが違う。

そういうことなのかしら……。

『まりもさん！ 数が多くてキリがありません！ ここは一気に突き抜けましょう！』

「了解！」

考えていても始まらない。

今は着いていこう、この人に。

きっとそうすれば……世界は、人類は救われるはずだから。

そう思つて私は不知火を全速で跳ばした。

「まつたく……BETAの数は底なしですねー。」

俺 アスラン・ザラ はそう愚痴る。

なんとかさつきのBETAの大群から逃げ切った俺とまりもさんは併走してハイヴの中を進んでいる。

恐らく階層的には最下層まで来ているんじゃないかと思つ。

『ふふふ……ですがアスランさんの技量だともう少し多くてもいいんじゃないんですか?』

「ははは……過大評価しそぎですよ」

『アスランさんは自分を過小評価しちゃうであります』

俺の言葉に少し含みを入れて返すまつもさん。  
どうやら緊張はとれたみたいだ。

始まつたばかりの時は全然喋れでなかつたけど、少しひして少し笑いを入れた会話もできるようになった。

「ならまつもさんも自分を過小評価しちゃうでありますよ」

『そんなことあつません……アスランさんは遠く及びません』

俺の言葉にまつもさんは返した。

正直に言おう……まつもさんはかなり凄いと。  
精密な射撃に冷静な近接戦闘。

実力的には伊鶴さんと同等か、勘を取り戻せばそれ以上かもしだ  
い。

「まつたく……まつもさんは……」

俺はまつもさんがあなたも凄いですよと言おうとしたが、

ページ、ページページー！

警告笛に遮りきれてしまつた。

見ると今までの比じやない量のB E T Aの大群が迫つていた。

「まだ来るか……まりもさん！ 恐らくこれが最後です！ 気を引き締めていきましょー！」

『了解ー。』

まりもさんの返事を聞いて俺はかなりのスピードで銃を乱射しながら敵陣に突っ込む。その後ろからまりもさんの援護射撃が来る。

「頼もしいね、まつたくー！」

そう叫んで俺は弾の無くなつた銃を捨て、長刀を取りだす。そのまま田の前にいた小型種を薙いでいく。

『アスランさん！ 一時の方向より突撃級！ 気をつけてくださいー。』

『了解ー。』

まりもさんの助言を受け、そちらの迎撃に回る。

そこにいた大型種の攻撃をかわし、背中から斬りつけた。

そのまま奥に進む。

『小型はいたらで潰します！ アスランさんはそれ以外をお願いします！』

「了解！ やってやりますよー。」

俺はそいつと片手に短刀、もう片手には長刀を握りしめる。残りの推進剤ももう残り少し。

ならまあ……やってやりますか。

「BETAよー、お前たちには足りないものがあるー。」

『ア、アスランさん？』

俺の言葉にまりもさんは驚いて通信を入れてくるが無視をする。『めんなさー……今はこのままのらせてくれださー。』

「お前たちに足りないもの！ それはー。」

俺はそう言つと一か所に固まつてゐるBETAの大群にフルスピードで突つ込む。

そしてすれ違ひざまに切り裂いていく。

「情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ…」

どんどん不知火力スタムの後ろでBETAが絶命していく。  
そして俺は最後の突撃級に突つ込む。

「そしてなによりもおおお…」

俺はそう叫び長刀を振り上げ

「速さが足りない…！」

切り裂いた。

その瞬間、俺の後ろで数えきれない量のBETAが一気に倒れた。

レーダーを見る。

BETAの反応……ゼロ。

そして目の前に見えるのは……

『反応……炉』

「はあ……はあ……やつましたね、まりもさん…」

『…………』

だが俺の声に反応は無く、沈黙が訪れる。  
あるべー？ ビーハしたの？

『やつ……ました。やつました！ アスラシンセー！ 反応炉に！  
反応炉に到達したんです！…』

その沈黙を破ったのは泣きながら大声で叫ぶまりもさんの声だった。

『ええー！ やつたんですよ！ 僕たち、たつた2機で！…』

まりもさんの声につけられ、俺の声も自然と弾む。

「の田は俺とまりもさんにとって忘れられない田になる…  
…と、俺は思った。



第10話 野生のアスランが現れた！（後書き）

（感謝）

デステイニアープラン様、アルベルト様、七夜様、マサト様、感想、  
アイディアありがとうございました！！

（一言）

誤字脱字、ここがおかしいまたはここが良かつたなどありましたら  
感想かメッセージにどうぞ

## 第1-1話 晴を晴と見抜けない奴は（前書き）

遅くなつてごめんなさい！  
あとマジで久々に書いたので酷い事になつてます！  
注意してください！

## 第11話 噂を噂と見抜けない奴は

10月27日 午前

「う～、ガンダムガンダム！」

今、ガンダムを求めて全力疾走している僕は国連軍に所属する「」く一般的な衛士。

強いて違うとこをあげるとすればガンダムが大好きってことかな……。

名前はアスラン・ザラ。

そんなわけで機体の置いてあるハンガーにやつてきたのだ。

「ハツ！？」

ふと見ると、ハンガーに一体の灰色のガンダムが布をかぶつてたたずんでいた。

「ウホッ！ いいガンダム……」

……と言つ事で早速搭乗。勿論、夕呼さんから許可は得てるよ。

う～む……相変わらずガンダムのコックピットは良いなあ。戦術機もいいけどさ。なんて言うか俺にはこっちが合ってるんだよね。コンソール開いて……うんうん、良い感じ！ ちゃんと整備してたみたいだね！

「これをこうして……油圧計が少しおかしいな」

愛機はこうして定期的に弄らないとなんか嫌だし。アスランの記憶があるからかもしれないけど、ジャステイスは特別なんだよ。よし、俺のテンションが最高潮になりそうだ。言わせていただくと、ガンダムファンとしてリアルガンダムに触れることは神に触れることと同意義だからな？

んはあつ！ ジヤスティスガンダムたんの淡い赤色の鋼鉄装甲をクンカクン力したいお！ クンカクン力！ あああ！！

間違えた！ モフモフしたいお！ モフモフ！ モフモフ！  
モフモフ！ カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅい！！

アニメ活躍できて良かつたねジャスティスたん！ あああああああ  
！ かわいい！ ガンダムたん！ かつこいい！ あつあああああー

「ハラク版も発売されて嬉しい……いやああああああああ……」

あああああああん！！！ ぎゃ あああああああ！！！

ぐああああああああああああ！！！ 「ミックなんて現実じやない！

！！！ あ… プラモもアニメもよく考えたら…

ガンダムちゃんは現実じやない？ にゃ

あああああああああああああん！！！ うああああああああああ…

そなんああああああああ！！！ いやああああああああああ…

はああああああん！！！ ロズミック・イラああああ…

この！ ちきしょー！ やめてやる…！ 現実なんかやめ…！ て…

え！？ 乗つ…！ てる？ 本物のガンダムちゃんに僕が乗つてる？  
本物のガンダムちゃんに僕が乗つてるぞ！ ガンダムちゃんに僕が  
乗つてるぞ！ ガンダムのコンソールちゃんが僕を見てるぞ…！  
本物のガンダムちゃんが僕に乗られてるぞ…！… よかつた… 世

の中まだまだ捨てたモンじやないんだねつ！

いやつほおおおおおおお…！… 僕にはガンダムちゃんがいる…

！ やつたよカガリ…！ ひとりでできるもん…！…

あ、ロミックのジャスティスちゃんああああああああああああああ…

…いやああああああああああああああああ…！…

あつあんああつあんあ初代様ああ…！… ザ、ゼータ…！… ダブ

ルゼータああああああ…！… ガンダム様あああ…！…

うつううううう…！… 僕の想いよ全ガンダムへ届け…！ 全ての世

界の全てのガンダムへ届け…！

「…………終わった」

興奮状態で作業したからか、アツヒト晝つ間に調整が終了してしまつた。

結局、油圧計以外どこもおかしくなかつた。嬉しい反面、寂しくもある。あれだよ、息子が独り立ちした感じ。いや、息子居ないから

わかんないけどね。  
でもさ、いいじゃん。愛でたって。俺の愛機なんだよ、ジャスティ  
スは。

「よーし、今日も一日頑張つかー！」

うん、気合も入ったことだし、飯でも食いに行くか！

「あ、神宮寺軍曹ー、おまよひがわこまわー。」

「あ、ザラ中庄。おはよついざれこます。」「一緒にありますか？」

PXで朝食中にこもなりの幸運。まさか運良くまりもんに会えるなんて。今日はちゅうと遅くなつたから会えなこと思つてたよ。しかも俺の挨拶にこんな笑顔で返してくれるなんて……天使や。まりもさんマジ天使。

おつと、ここは紳士らしく椅子を引いてやうねば。

「じつにじつに、わが、お座りになつてください」

「わ、そこまでしなくても良いですよ」

ありや、逆に気を使わせやつたか。慌てて座りやつた。  
ま、いつか。まりもさんと食事ができるんだしー。

「昨日はおつかれさまでした。神宮寺軍曹の機動には驚かされましたよ」

一人で食事を初めて数分、一息ついたといひで俺は昨日の話題を振つた。

まりもさんもちゅうじ食事が終わつたよつて、でりきりで箸を置きながら口を開いた。

「そんな……ザワ中佐はお世辞が過ぎますよ。私なんて足元にも……」

「思つたんだけど、なんでもりもさんはこんなに自信が無いの？  
ぶつちやけた話、この人レベルなら普通にHースになれるよ。  
謙遜が美学なんて日本だけですよ。あ、でもこの日本は違うのかな  
？」

「なり神宮寺軍曹は謙遜が過ぎますよ。あなたがそんなこと言つたら嫌味になつちゃいますよ？」

「そ、そりでしょ？（も、もしかして……認められた……）？」

「やつドクよー。神宮寺軍曹となり俺、地球を守れちゃこやつですー。」

「う、嬉しいです……（や、やっぱー、あのアスランさん……）」

少し照れくさうに笑いながら俯くまつもさん。いやー……可愛い。  
ね。そして美しい。

でもこれ本気で言つてるから。アスランの記憶の中を見ても、まりもさん程のパイロットなんて数える程度しかいないよ。

天賦の才か……それとも努力の賜物か……。どっちにしても、人間つて追い詰められると凄い力發揮するね。

……ん？ なんか周りからの視線が……それに小声の話声も……。

「ほら、あれがザラ中佐よ……」

「ヴォーグルク・データを神宮寺軍曹と一緒にクリアしたつて言つ……？」

左から若い女性の声。

「二人でヴォーグルク・データつて……本当なのかよ……」

「本当なんだつて！ 今朝、副司令が言つてたんだよ！ 確定情報だ！」

右からは若い男性の声。

実は昨日、まりもさんとの訓練の後、ログを夕呼さんに提出しに行つたんだ。

あの時の夕呼さんの顔は見物だつたな～。あの夕呼さんが目を見開いて驚いてさ。

色々ブツブツ言つてたけど……なんで夕呼さんはバラしたし。戦意

高揚？

あ……視線が痛い。この場に屈辛い。……わざわざかわせ  
う。

「神面寺軍曹、そひなう行きませんか？」

「…………（やつたわ……いやでも、もつと頑張らなこと……）」

「あ、あの？ 神面寺軍曹？」

「え、あ、はい！ な、なんですか！？」

何か考え方をしてたのかな？ 鬼に角、顔を上げたまつむとこ」「  
周りを見てください」とジエスチャーを送る。  
……やつと氣付いたみたいだ。まりもさんも屈辛そうにしてる。で  
もなんか若干嬉しそうだな。どうしたんだる。やつぱり、ワオールク・  
データ攻略のことを誇りに思つてるんだろうか。

「…………」

「やつですね……」

結局、そのまま時間が来たとのことであつむさんと別れることになつた。

あ、でも今日も戦術機指南と言つたのと同訓練の約束を取つたよ。やつたねアスラン！仲間が増えるよー……おいやめろ。

「ゴールサイン、ですか？」

今俺が居る所は執務室。夕呼さんの部屋だ。

昨日の内に呼び出しを喰らつてたんだ。いや、別に悪にことした訳じゃないよ？

ああ、呼び出されたついでに今朝の事を聞いたんだ。何で「ウォールク・データの事を流したのかって。

そしたら案の定、「戦意高揚の為」だつてさ。でも、みんなから期待されるのは嬉しいね。俺の力じゃないけど。で話を戻すけど、夕呼さんに呼び出した理由を聞いたり、「ホールサインを決めておけ」とのことだ。

「そり、『ホールサイン』よ。部隊や無線が混同しない様にそりを決めて頂戴」

相変わらずソファーに座りながら優雅に「コーヒーを飲む夕呼さん。組んでいる足が途轍もなく色っぽい。それにしても……『ホールサイン』か……。そんなのも考えなきゃいけないのか。何が良いかなあ……。

「夕呼さん親衛隊とかどうですか！」

「殴られたいの？」

「ああん、ひどい……」

某兄貴の声を頑張つて出してみる。

「……が夕呼さん、目がマジですって！ でも悔しい！ 殴られた  
い！ ビクンッビクンッ。

そもそも俺にそんなことを決めさせるのが間違ってるんだって。俺  
のネーミングセンスの無さ舐めんなよ。  
ジャスティスとか？ いや、ガンダムといひちやになつちやうな。  
フリーダム？ デスティニー？ レジョンド？ ……違うな。  
幻想郷部隊とか……ねえわ。第8レスリング小隊とか……これもね  
えわな。だいたい、俺つて一機だけだから隊でもないしね。  
……ああ！！ あつた！ 良いの思い出したよ……！ これなら  
カツコいいし、俺の戦意も高揚する……！

「夕呼さん！」

「ん？ 決まったの？」

「メビウス1（Möbius1）なんてどうでしょう？」

そう、エースコンバート04の主人公であり、メチャクチャ強いエ  
ースの中のエース！

最後の方には僚機が居たけど、殆どたった一人で戦つてた英雄だ！  
あれはマジで男の子の心をくすぐる。もうほんとに興奮したね。

「メビウス……数学者の名前ね。あとは無限とか終わりなき……つ  
て意味」

「や、やつですその通りです！ 良くないですか！？ 隊章も考えてあるんですー！」

し、知らんかった……。そんな意味あつたのか。ヤダ、恥ずかしい。隊章は勿論エー フンバット04のメビウスのやつだよ。

厨ー？ おいいら、今エース フンバット厨ーって言つた奴表出る。

「良いんぢやない？ それぢや あ今日からあんたはメビウスーね。シユミレーターの時からそう心がけなさい。隊章はあとであたしに原案でも持つて来て頂戴」

「あらがとうござりますー あ、夕呼さん。一つお願ひしていいですか？」

「なによ？」

「『リボン付きの死神』って通り名が俺にあつたって事にしてもらえますか？」

「これはメビウスーの通り名だ。」

やっぱり自分に通り名があるとヤル気出るよね。

他にはラーズグリーズの『靈や田舎の鬼神とか色々あるけど、あれつてみんな部隊名違うしなあ。お

「……なんですよ？」

「うわ、夕呼さんの顔が面倒くさいって感じでるー。」

「……で俺の為、とか言つたら拍合われぬ気がする。と言つつか殺される気がする。」

「だがしかし！ こればっかりは成し遂げたいんだ！ 夕呼さんには悪いけどーー」

「勿論、戦意高揚の為ですよ。俺だけでなく、横浜基地全体の」

「…………と…………？」

「夕呼さんも今朝やつたじゃないですか。ああいうのですよ。同じ基地には凄い奴が居る！ って思われるんです。勝気な奴なら俺に負けまいと訓練に身が入るでしょうし、弱気な奴はそんな奴が居るなら死なずに済むかもと緊張がとけるでしょう。どっちにしても良い事尽くめですよー。」

嘘はいけないよ。だけど「これには少しばっかりの本心も入ってるから良いと思つんだ。」

え？ だめ？ …… 救いは無いんですか！

でも夕呼さんのことだから簡単に嘘と見抜いてきそう。ビビるわ。

「……わかつたわ。あんたの話の事も一理あるしね。そこまで話すならやつとてあげる。その程度の情報操作なら簡単よ」

「え、あ、ありがとうございます！――」

まさかの展開。夕呼さんが了承してくれた！  
やつたねアスラン！ 厨一が認められたよ！ ……だからやめろって。  
それにしても、夕呼さんの割にはあつたり認めてくれたな。もっと  
疑り深い人だと思ってたのに。  
くそ、結婚したいぜ！

「それじゃあ話は終わつよ。それと出て行きなさい」

「ああん、ひどい……」

「それ、流行つてんの？」

いや、出て行けと言われたからには出て行くけどね。夕呼さんの仕事のじやましても悪いし。

「いえ、それでは失礼しました！ 夕呼さんもお仕事頑張つてくだ

「はいはい」

「はいはい」

夕呼さんの面倒くさそうな返事を聞きながら部屋から躍り出る。つい  
ん、リアルに踊つてた。

さあこのテンションをキープしたままショミーネーターだ！ 今日は  
頑張れそうな気がするぜー！

…………この日、俺はまりもさんとの合同訓練で彼女が息絶え絶え  
になるまで戦つてしまつた。

「夕呼さんも今朝やつたじゃないですか

あたし 香月 夕呼 に、そうアスランは言った。  
今朝やつた事。それはこの質の低い横浜基地の戦意を、少しでも高揚させようとヴォールク・データの事を流した事。  
でも、それが一体なんだって言つの？

「同じ基地には凄い奴が居る！ って思わせるんです。勝気な奴なら俺に負けまいと訓練に身が入るでしょうし、弱気な奴はそんな奴が居るなら死なずに済むかもと緊張がとけるでしょう。どちらにしても良い事尽くめですよ！」

正直、驚いた。

少しは自分の為もあるのだらう。通り名と言つ物は少なからず自身の戦意を高揚させる。

だけど、ここまで他人の事を思つている者が居るだらうか。  
そう言えど、噂で聞いていたわ。アスランがシュミレータールームで他の衛士の事を観察していると。

だれがどんな戦闘をするのか。どんな性格なのか。そうやって見えてきたからこそ、こんなことが言えるのだらう。

現に、あいつの田は必死だ。なんでそんなに誰かの為に必死になれるの？ どうしてそこまでできるの？ 聞いてみたいけど、今のあたしにそんな権利は無い。

「……わかったわ。あなたの言つ事も一理あるしね。そこまで言つならやつといてあげる。その程度の情報操作なら簡単よ」

「え、あ、あらがとうござります……。」

だけど、「そんなことは考へていません」とでも言いたいかの様に無邪気な笑顔を見せてくる。

何でこいつはこんなに……アスランは一体何を見てきたつて声の？

まったく……興味が尽きないわね。次の研究材料にしてやろうかしら。

……その前にやるといもみいのだけどね。

## 第1-1話 噂を噂と見抜けない奴は（後書き）

たくさんの方々、アイディアどりもありがとうございました！  
参考にさせていただきます！

隊章が何のことかわからない人は、メビウス1でごと幸せになれるかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2219m/>

---

Muv-luvに来た転生者（笑）

2011年8月21日21時00分発行